

Eureka, 青龍 *έκστασις* 2

Act 2. Study of *έκστασις*

Act 2. Study of *ékotaoris*

5 アカデミア

Iðea (Idea : イデア) 山の断崖絶壁に、zigzag にアカデミアへの道が掘られている。

「正確に言えば、山ではない。

垂直にそびえ立つ、1個の巨石だ」

イースがそう教えてくれた。

摩天楼のように、大地から、とうとつに突き出し、とんがっている。ふつう、山は傾斜を持つけど、イデアは壁だ。

ふもとに着き、見上げると、のしかかってくるように見える。

「アカデミアで、聖なる象徴をあらわす『IYE』という文字があるの。

その頭文字 I と、同じかたちだといわれているわ」

こんどは、ANKA がそういう。へー。

道に入った。なかば洞窟みたいだった。

掘削の跡が生々しい。手掘り。ノミや、鋏で、少しずつずったんだろーな。

登るにつれて、景色が見わたせるようになる。

北の山岳地帯のほうは、広大な、白一色の空間だった。

さいしょ、この路なら、吹雪もいくらか弱いからおもったけど、

じっさい、入ると逆で、せまい筒状のなかを凄まじい速度で荒れている。

一瞬だけ、とうとつに、風がやむと、雪が宙にとりのこされ、霞のように、ゆらゆらただよってから、おちた。幻想的……さらさらした、かるい雪質のせいか……でも、すぐに凄くふき荒れる。

憂鬱なきぶんになった。時間を長く感じた。

ようやく洞窟みたいな道をぬけ、頂上にたっし、ひらけた場所に
出る。

壁が見えた。城壁だ。石をつみ上げた壁は灰いろで、霧雨みたい
に哀しい。

自然のままの荒削りな壁のまえ、神々しく金属的に光輝く鎧兜
で武装した人たちがならんでいた。

「叡智を護る衛兵だよ。」

真理は命をおしまない高潔な戦士たちの勇気によって、護られる」

イスがそういった。

なんの表情もない、感情も入っていない。

壁には、門が切られていた。

門は巨大なアーチだ。壁がすぐぶあついから、アーチというか、

トンネルみたい。

尖塔が門の両わきに、そびえてる。戦いを、ずっと、見まもつ
てきた、誇り高く、きびしく、情け容赦のない塔だ。

門の上には、楼閣があった。

楼閣っていつでも、豪華さはかけらもない。城砦、ってゆーのが

ふさわしいような、とんがった建物だ。

新規ユーザーは、みんな、ここで馬車から降りる。大渋滞してい
た。

たくさんの護衛兵が列している。

威猛々しくならぶ彼らが精鋭シールド部隊ウォールだよね。そー

そー、あたしも、わかってきたでしょ？ 眠いのがまんして、イー
スから借りた説明書、ちよつと、読んだんだよ。ちよつとね。

そのなかに、くるぶし丈のロング・コート、黒い影のように黒づ
くめの男たちもまじってる。あたし、びっくり。

「あ、あれ、あたしたちを見ていた男」

「なによ、あれが例のやつなの？ たくさんいるじゃない」

エリコがとがめるようにいう。

ANKAも、一瞬、あぜんとしてたが、

「あ、そっか、ウイルス対策なんだ」

「へ」

「ウイルスをはこんで来るユーザーがいらないか、チェックしてるのよ」

「あたしたちを!?!」

「たぶん、みんなよ」

「うーん、そっかなー。なんか、ちがう気がする。」

だってー、あたしたち以外のユーザーも、ぜんぶ視てるんだったら、もっと、あっちこちで眼についていたはずじゃない?」

そこへエリコが口をはさんで、

「うざいわねー、きいてみりゃー、いーじゃん」

そのとき、ちょうど、あたしたちの馬車が停車する順番がきていた。エリコは、飛び降り、走ってコートの男たちのうちの1人のまえに立ちどまった。

「ねえ、あなたは、ウイルスをスキャンしてる人でしょ?」

男は、あごをつき出して、まっすぐまえをにらんだまま、無言で、エリコに眼をむけさえもなかった。

「ちよつとー、なによー、あんたー、こたえなさいよー」

そこに僧衣すがたで、丸い鼻メガネの男が来て、あいだに入る。

「ちよつと、きみは、新規ユーザーだね」

「あたりまえじゃない、この状況で、新規以外って、いるの?」

「バリユースに話しかけてもムダだよ。彼らは、いかなる情報も漏洩さない」

「どうわ!?　じゃあ、あんた、知ってる?　彼らは、だれにでも、つきまとい、チェックするの?　もちろん、新規ユーザーだったら、ってことなんだけどー」

「さあ、そんなことは……。きいたことがないが。」

しかし、はつきりとは……断言できない。いつでも、シークレットだからね、彼らの行動は」

あたしたちは、そんなやりとりをききながらも、エリコのぶんまで、荷物を降ろしていた。彼女は、もどって来るなり、手つだいもしないで、ぶつぶつ愚痴る。

作業を終えて、ANKAが城壁を見上げながら、嘆息し、

「いま、考えても、なにも、わからないわ」

あたしたちは、ぐしゃぐしゃになっている雪の上を、荷物をひきずりながら、門の下に入った。雪がなく、ぬれた黒い敷石。

入ってみると、まさしく天井の高い、巨大なトンネルだ。

威圧感が無言で、とどろきわたっていて、まるで、大穹にとどろく霹靂みただった。

眼がなれてくると、なんと、階段や、窓や、門扉があるのが見えてくる。人が住んでる!?

バルコニーに人が立っているし。日あたりわるそお、つか、あたらねーだろ、日射し。

あちこち小さな聖火がともされている……

聖歌がかすかに、香のようにながれていた……

門をぬけ出ると、眼のまえに、建築群。

古い建物が雪をかぶって、せまるように、そびえるすがたは、いかめしくて、ちかづきにくい。

外から見上げたときは、建物が寄り集まって、剣の切っ先みたいに見えていたけど、眼のまえにすると、ヨーロッパによくある、ふつうの古い街なみにも見えた。

あたしたちは、列になって、みんなと同じように、すすむ。

すすむにつれて、山のような、大きな大聖堂へと、ちかづいていく。

あたし、まちびびった。デカすぎない？ 空がはんぶん以上、かくれる。すげー。写メ撮ろ。あ、画面におさまんねー。

大聖堂のまえは、円形の広場になっていた。

広場を抱くように、屋根のついた大理石の円柱がならぶ。

「列柱廊、っていうんだ。屋根の下が通路になっている」

イスがまた教えてくれた。

やぶれた僧衣の老人が長い杖を持って広場に立ち、つぶやいていた。

「さいわいあれ、大真理が鎮座しておられる大聖堂に。さいわいあれ」

あたしは、ANKAの顔を見て、

「なんのこといってんの、この人？」

教えていう、

「聖典『kOO』が保存されているのよ。’11年5月に、マコトヤ・アマヤスによって著わされた、聖典中の聖典よ」

マコトヤ・アマヤス？　なんかりアルっぽい、なまえ。アバター名や、ハンネじゃないみたい。

しかも、’11年って、そんなに古いことじゃないじゃん。

聖典っていうと、埃かぶってそうな、古代っぽいイメージあるんだけど……

広場をよこ切り、列柱廊をスルーする。列柱廊の屋根の上に、いく百も、聖人の彫像群が、ずらっと、ならんでいた。

あたし、見上げながら、ため息した。凄すぎ。

聖堂を迂回して路地に入る。

路地は高い石造建築群の谷間にあり、せまくて、湿っていて、暗かった。

荷物がぐつしよりぬれて、重くなってきてる。腕がだるくなる。

「もー、どこまでいきやあ、いいのよ！　ポーターとか、いないの？」

エリコが怒り出す。

あたしも、いーかげんキレそうだった。

いつ、いかん、いかん。クドク、クドク。なんか、はやくも、わすれてんなー。

左にまがると、小さな広場に出た。古い噴水がまんなかにある。

広場をかこむように、いくつか建物があった。あたしたちは、大きい建物にむかう。3階建てに見えた。1階の四面すべてが列柱で、いくつものアーチをつくっていた。

ピエロのような聖職者たちが太鼓をたたき、チャルメラを鳴らし、建物のまえに立って、大笑いしながら、

「あはは。

さあ、さあ、そおれ、そおれ。

笑う門には、福が来る！ さあ、さあ！

オリエンテーションがはじまるから。集会堂に入ってくださいあい。

こっちに、集まってくださいあい」

陰気臭い祈祷僧が香の壺を金のクサリで吊るし、ゆらしながら、低い声で、讃歌をくり返し、入ろうとする者たちを清めている。

「神は偉大、神が正義、神は永遠の真理、神こそが生命！
永遠の真理を讃美せよ。

ログスに、栄光あれ。

真実こそが生命、生命であるから、それを真実とよぶのである」

あたしたちは、てきとうなアーチから、なかに入っていた。アーチの上部に、石の透かし彫りがある。

「さあ、さあ、奥からつめて。席に着いてくださいあい」

粗い織りの僧服の男がそういう。世俗の慾とは関係のない、森に住む世捨て人のような、質素さ。片手にパンを持って、モソモソと食べている。

ANKAを先頭にし、なかに入った。

外から見たときは、3階建てに見えたけど、なかに入ると、天井の高い、1つの大きな空間だった。

暗くて、ともかく、ひろい。窓は高いところにあるので、光があたりわたしたちの場所までとどかない。

粗末な、長いベンチがたくさん、ならんだ。新規登録者たちが音を立て、つぎつぎ席に着く。

聖歌隊が集会堂のなかにならんでいる。昏いなか、ロウソクの火に照らされたすがたは、まるで彫像のようだ。

白と赤の礼装で、聖堂附の専属衛兵が大きな聖旗をかかっていた。聖楽隊の金管吹奏楽部隊がラッパを鳴らす。

旗から、バラの花びらがあふれあらわれ、ひらひら宙を舞った。

花びらがおちた場所には、黄金の梵字があらわれ、一瞬で消え

る。聖歌隊の讃美歌がおごそかに、はじまった。

空気がふるえ、音のひびきが霧のように残存する。

空間が祓いきよめられ、清爽の気がひろがった。

どこかから、鐘の音がきこえてくる。ふしぎな残響音が、いつまでも、つづく。

ANKA、イース、ミーシャ、エリコ、あたし、の順で人をかきわけて、すすむ。人と人のあいだで、もみくちゃにされて、はぐれそうになるから、イースがミーシャの手をにぎっている。

あたしも、はぐれそうだおー。いっしょうけんめい、エリコを見失わないように、がんばる。

ようやく席に着いた。はあ。

坐ると、すぐに、エリコが荷物をゴソゴソやり出した。ビニール袋を出して、もしやもしや食べ出す。おお、バナラ・クリーム・サンド・クッキーか？ 匂いでわかつちやう、あたしって…… (・_・;) ANKAがキツとにらむ。エリコは、素知らぬ顔で、

「知らないの？ 紋章入りクッキーよ。聖人を象徴する紋章がかたどってあって、噛むと、御神籤が出てくるのよ。……ああっ」

「どうしたの！」

ミーシャがしんぱいそうに、きく。けど、あたしは、

「やっぱ、凶でしょ？」

「ちがうってば。末吉だわ。びみよおー。意味、わかんねー」

そういって、エリコは、クッキーからひっぱり出した御神籤をまるめる。

「なんだ、つまんない。いーじゃんか、ようは吉だし」

って、あたし。

「わたしはねー、大吉しか受けつけない体質なんだよねー」
きいたことねーって。

「ねー、なんか、はじまりそおだよ」

ミーシャがエリコの袖ひっぱって、そういうと、ANKAが、
「てか、もう、はじまっているよ。しずかにしてくれない？ きこ

えなくなるわ」

暗くて、よく見えないけど、正面奥に、低い壇だんがあつた。壇上だんじょうに演台えんだいがある。

見ると、壇上だんじょうに、だれか立っていた。

ケータイのカメラで、動画撮とって拡大しながら、見る。シルクのようなつやの黒い服、やせて長身ちようしんの人。髪はボサボサで、ワシ鼻ばな。エコーのかかった声が反響する、

「アカデミア事務局の局長、ハーロック・シオルムスである。

今後のスケジュールであるが、いまからいうことを、きちんとメモするように」

エリコが微笑ほほえんで、わたしのほうを見る。

「ねー、鉛筆貸えんぴつかしてくんない？ どこかに、おとしちゃったみたい」
さいしよつから、持って来てないんだろ？

「ふーん、いいよ」

ハーロック局長きよくちようが語り出す、

「まずは、明日、ここにいる全員が基本講座きほんこうざを受講じゅこうしてもらおう。

場所はカテドラル大聖堂。ここまで来るとちゅう、見たであろう。

聖の聖なるアカデミアの中核ちゆうかう、アカデミアの精神、最も神聖な場所しよだ。

講義こうぎはアカデミアの学長イクシヴアーンがおこなう。

朝7時までに、集合しゅうごうすること。

遅刻者ちこくしゃは、IEのエントランスから、やり直しとする。かならず

出席するように」

ふんふん。メモメモ……っと。

「そして、基本講座きほんこうざの終了後しゅうりようご、3日以内に、2つの専門講座せんもんこうざを選択せんたくすること。

むろん、3日をすぎてもよい。べつに、3日以内という決まりがあるわけではない。

しかし、アカデミアで勉強べんきようできる期間きかんは、今日をふくめて27日間しかない。

基本講座終了後3日以内（つまり、ここに来てから、5日以内）に決まらないようでは、卒業できなくなるのは、あきらかだ」

そ、そおだったのかー……焦っ！

「主となるメイン専門講座と、副となるサブ専門講座とをえらべ。

2つの専門講座をえらべといったのは、そういう意味である。

パンフレットに書いてある説明をよく読んで、内容を確認した上で、えらぶがよい。

講座には定員があるから、希望の講座を受講できないばあいもある。

よって、第3希望まで決めておくがよい」

ふむふむ。なるほど………？

「わかったか。

しよくんは、卒業後、就職を決めることとなるだろうから、専門講座の選択にあたっては、よく考えて決めよ。

しかし、専門講座に関係した職業をえらばなければならないというわけではない。

就職は勉強したこととは、無関係に、自由に、えらんでよい」

ふーん。あまし意味ないつつーことか。

「参考までに、教えておくが、師範らは、もともとは、しよくんと同じくアカデミアの生徒だった者だ。

卒業後も、たのしい冒険を求めずに、アカデミアで学究をつづけ、しよくんのような後輩たちに、正しい智慧を伝授するため、難度の高い師範試験に合格した、成績優秀で、気高く、崇高なる者たちだ。

しよくんを、よく理解し、正しく導いてくれるだろう」

なんだか、めんどくさい輩のような気もするけど……

「さて、つづいて、生活面だが」

事務局長は、いったん、言葉を切ってから、つづけた、

「しよくんは、全員寄宿舎に入って、寮生活をしてもらう。

ぜんぶで、2千棟あるが、そのうちの、5つの棟が今回の新規登録者の入る寄宿舎だ。

よって、1棟あたり1千人のわりあてになる。

部屋わりはこれから案内するが、ここにいるあいだは、5人で1つの班をつくり、班ごとに1つの部屋をつかうようにすること」

おお、あたしたちって、ちよーどいいーじゃん！

「班をつくるとき、キャラの組みあわせは自由だ。5つそろうのが理想だが、かまわない。問題はまったくくない」

ふふ……

あたしたち、かんぺきよ。5つのキャラがそろってる。

「さあ、班が決まったら、入寮受付をせよ。では、解散だ」

バジリカを出たところに、いつのまにか、77張の極彩色のテントがならんでいて、そこに受付があった。ANKAが受付をしてくれた。じぶんたちのいくべき棟も、その受付で教えてくれるらしい。

あたしたちは、バジリカの外壁にへばりついて、ANKAの帰りを待った。荷物はグシャグシャ。

「寒いねえー」

ミーシャがあたしのほうをむいて、そういった。いわれなくとも、わかってる。雪、降ってんだもん。ブルるッ。

ANKAがもどって来た。

「パルメニデスだって。部屋番号は512号室」

「イオニア派の大哲学者の名を冠しているのか」

イスがそういったけど、あたしもミーシャも、意味不で、

「？」

ANKAが無視するという、

「ともかく、そういうなまえの寮なのよ。いいから、あたまの上の？マークしまいなさい。いい？ちよっと、きいてくれる？

まず、部屋に入ったら、すぐに、荷物整理をすること。

そのあとは、午後5時に、食堂に集合。寮生活のレクチャーがあるそうよ。

それから夕食、そして就寝。翌日、朝5時に、起床して朝ごはんをすませ、7時からの基本講座には、おくれにないようにすること。

以上よ。いい？ わかった？」

雪のつもった、ほそい路地を、パルメニデス寮へ、むかつていく。暗くて、せまくて、風になぶられ、よごれた雪がつもってる。

あたしたちは、人のながれにしたがつて、路地をぬうように寄宿舎へむかう。

路と路とが交差するところでは、質素な僧衣の人が立ち、寒さにふるえながら、

「ブラジュニーヤ・パーラミイタ寮はこちらあつ」「パトモス寮はこちらあつ」「ミトラ寮はこちらあつ」「ジェイル・ハウス・ロック寮はこちらあつ」

と無表情に、抑揚のない鬱な声で、案内している。

「パルメニデス寮はこちらあつ」

あつちらしい。かどをまがった。ますます、大通りからは離れる。

「あ、あれだよ、きつと」

エリコが声を上げて、指さすほうを、あたしも見る。

「ええー？」

ミーシャがこまった顔をする。

あたしも、見た。

濃い灰いろをして、粗い質感の石をつみ上げ、つくられた建物。とりわけえらそうに、はばひろに建てられてる。

威丈高な、大玄関。よこにひろい階段の上にあつた。
陰鬱。

まさに、その一言でしかない。たくさんの彫刻が繁茂したような建築物……

「なんかあー、怖いよー」

「なにバカなこといつてんの、ミーシャ。素敵じゃない、ゴシック建築」

「まち？ ステキかよ」

て、あたし。ま、きらいじゃないんだけど、ほんとわ。

「べつに、関係ないとおもうが」

イスが剣^{けん}の位置を直しながら、そういった。ANKAも、
「さあ、つべこべいわないで。いくよ」

「ちかくに、コンビニとかないね」
ミーシャが残念^{ざんねん}そうに、そういう。

エリコがすぐに、

「なにいつてんの？ あるわけないじゃん。なんで、欲しいわけ？」

「だあって、夜おなかとかすいたらどーすんの？」

あたしも、

「そうだよー、日用品^{にちようひん}とか、買わなきゃいけないときだって、ある
じゃん」

「あんたらねー、そんなのどうにかなるように、できているに決ま
ってんじゃん。」

もう、なん百万人も、ユーザーいるんだからさー。あたまワル」

うつせーよ、エリコ。

「なんの情報^{じようほう}もないのに、いくら考えても、想像^{そうぞう}でしかないよ。レ
クチャーのときに、わかるんだから、グダグダいわない！」

ANKA、あんたのいうとおりだ…。

あたしたちも、ほかの人たちにつづいて、階段を上がって、彫刻^{ちようこく}
のある正面^{しょうめん}玄関^{げんかん}から入る。紋章^{もんしょう}があり、龍^{りゅう}と鷹^{たか}がテーマだった。

ゾウが通れ^{とお}そうなくらいひろい玄関^{げんかん}だお。やっぱ、なんか怖えよ
ー。

入ると、エントランスだ。暗^{くら}あい。

なん千年も、人にふまれていたみたいに、絨毯^{じゅうたん}がくたびれていて、
いろもあせていた。絵柄^{えがら}は卵^{たまご}みたいな黄^きいろが基調^{きちょう}で、あかるい緑^{みどり}
の蔦^{つた}に、真っ赤な花が咲いているのが…かすかに、わかる…。

新入生^{しんにゅうせい}は、みんな、掲示板^{けいじばん}のまえに集まっていた。

チョークの文字が古いネオンのように、光^{ひか}っている。

ANKAがさっと見て、

「512号室は南棟^{みなみどう}だわ。あっちの階段を上るみたい」

あたしたちは、彼女についていく。それしかない。

いくつかある廊下の1つに入っていく。

小さな広間に出た。そこから、また、いくつかの廊下がある。

うわ、迷路だわ……。おぼえられるかなー。

けど、あたしたちは、そちらへはいかず、木製の手すりが見ごとな彫刻で装飾された階段を上がっていく。

上った。ふーっ。壁には、肖像画がかけられている、いっぱい。きみがわるい。

とちゅうで、1枚のタペストリーに眼がとまった。

「これって、なに？」

あたし、おもわずきいちゃった。だって、織りこまれた絵柄が、なんとも、ふしぎな光景だったからだ。

冷たい感じの、月夜の風景。大きな湖が照らされている。

まわりは、すごく高い絶壁の岩山？ それが円劇場のように、湖をかこんでいた。

水面が鏡のようにしずか。

でも、よく見ると、小さなさざ波が立っている。1ミリもないんじゃないかとおもえる、小さな波の図柄。それが織りこまれている。

しかも、そのこまかい波の1つ1つに、月光があたって、銀いろにきらめいていた。精緻な技巧で、くつきりと。

見つづけることがたえられないような、細密さ……。そして、死のようにしずまり返っている……

湖のまんなかに、大きな黒岩が突き出ていた。岩の上には、純白の尖塔を、たくさん屹立させる城がある。

「湖上城よ」

ANNAがいった。

「こじょーじょー？」

「そー。そのまんまっしょ。」

湖の上にあるから、湖上の城、湖上城よ」

「なんか、すごい、冷たい感じ。しずかすぎて怖いよ。無音ってか、吸いこまれそう。月が凍てついてるみたいだし……」

ミーシャも、

「ほんとー、こんなところに住^すんでるのは、ゾンビみたいな人ね」
イスが笑った。

「あたらずといえども、とおからず、だな」

エリコが顔をしかめ、うなつて、

「うーん。ラグナレク伯爵^{はくしやく}の居城^{きじょう}よね」

あたし、声を上げ、

「神々の黄昏^{ラグナレク}？」

ANKAが鼻さきで笑い、

「ふ。わたしたちに関係ないわ。さ、いこうよ」

エリコは、まだ、むずかしい顔をし、

「なんか、いいうわさ、きかないわよね。」

悪魔^{あくま}に魂^{たましい}を売ったとか、こどものころ、じつの親を殺したとか」

「えー」

つて、あたしとミーシャ。

「さ、いくよ」

そういうながら、ANKAは、ふたたび、階段を上がりはじめ。
上ると、長い廊下^{ろうか}があらわれた。

地上5階なのに、古い城^{しろ}の地下室^{ちかしつ}みたい（見たことはないけど）。
壁^{かべ}も、床^{ゆか}も、ゴツゴツした、むき出しの石組みだ。んー、CGだから、なんでもありだなー。とりあえず写メ。

煙^{けむり}の出ない、小さな篝火^{かがりび}が点々^{てんでん}とならんで、あかりになっている。
るだけだから、奥^{おく}は暗^{くら}くて、よく見えない。

廊下^{ろうか}の左右^{さゆう}には、部屋^{へや}のドアがだまったまま、ならんた。

「512号室^{ごうしつ}って、どこよおー」

エリコ、もう、限界^{げんかい}か？ たしかに、荷物^{にもつ}重^{おも}すぎ。

あたしも、もうダメだわ。ひきずりまくりだし。けど、がんばろ。
ようやく、たどり着^ついて、ANKAが、

「さあ、ここよ」

っていつて、怪物^{かいぶつ}の彫^ほり物がある重^{おも}そうな、黒っぽい櫥^{かし}の扉^{とびら}を

あけた。

あたし、なかに入るのが怖くて、ひるんだ。よこを見ると、エリコも、唇くちびるをへの字にして、足がまえに出ない。

ミーシャが、

「え、どんなふうなのかしら」

っていつて、ANKAのあとにつづく。

そのとたんに、エリコが、

「さあー、さあ、グズグズしてないで、とっとと入るのよ」

って、なんでもなかったかのようにふみこむ。うぜー。

あたしは、エリコみたいに調子ちようしいやつじやない。すぐに部屋へやが見たかったけど、あえて、うしろのイスのようすを見た。

頬ほほに唐獅子からじしの刺青いれずみがある黒髪くろがみの少女は、みんなの背後はいごをまもるため、いちばんあとから、入ることを決めこんでいるらしい。

エリコにつづいて、あたしも、入った。

おもっていたよりも、まとも。っーか、家庭かていてき的だ。

カーテンのしまった暗いくら部屋へや。ソファがあつて、そこがリヴィン

グルームらしい。

ANKAがカーテンをひいた。窓だ。

ミーシャの声がきこえる。

「えー、こんな感じなんだ。窓、少ない」

エリコは、部屋へやの中央かへの壁かべにむかう。

「見て、暖炉だんろよ。薪まきを燃もやす、ホンモノの暖炉だんろだわ。大きいわね、わたしたち、入れそうなくらいよ」

部屋へやは5人が住すんでも、じゅうぶんなくらい、ひろい。

窓のかたわらに、1メートルくらいのくぼみがあつて、小さな祭壇さいだんが祭まつられていて、女神像めがみぞうがある。祭壇さいだんのまえには、紺碧こんぺきと深紅しんくとが基調きちようの、小さな絨毯じゆうたんが敷しいてあつた。黄きいろや緑みどりの、蔦草模様つたくさもようが入っている。

あたしがじつと見てると、

「壁龕へきがんっていうのよ」

「へきがん？ ANKA、なんなの、それ？」

エリコがニコニコしながら、飛んで来た。

「あーら、知らないのお？」

西洋建築なんかで、壁とか、柱とかにつくる、くぼみのことをいうんだよねー。

彫刻とか、飾るためのね」

イスが、

「ニツチとも、いう。

建築や、美術史でいえば『なにかを設置するために、壁や柱の垂直面の一部につくられた、くぼみ』のことだ。

なにかを設置する目的で、垂直面に設けられたくぼみのことは、

ぜんぶ、「壁龕（ニツチ）」だともって、いい。

崖や、洞窟の面を彫ってつくった岩窟像なども、壁龕とよばれることがあるけど」

ミーシャが、

「この女神さまは？」

「智慧と戦闘の女神イシヤンナ・ジーナね。智慧の神イシヤンと戦闘の神ジンとが龍と鷹のすがたで戦ったとき、その衝突から生まれた女神よ」

ANKAがそうこたえてくれた。

「ふうーん」

「あっちこっちで蛇のからみついた、鷹や鷲や獅子の紋章や彫像を見ることになるとおもうけど、蛇は智慧の象徴で、鷹が戦士、獅子や鷲は、王族の象徴なのよ」

「龍は？」って、あたし。

なぜか、龍が気になって、きいた。

「神性、または、神的な叡智ね」

「へー」

「あのジン・メタルハートの、ジンというなまえは、戦闘神ジンにあやかろうとしてつけたハンドル・ネームよ」

「え、あのジンが？」

あたしがそういうと、イースが、

「ジンに会ったのか」

「会ったのよ。ANKA、知りあいみたいなんだけど、ふゆかいなやつだよ。知りあい？」

「まあね」

すると、エリコが、

「ちよっとお、なんか、ANKAも、イースも、すごくいわくありげなんだけど、ジンと、なにがあったのよ。このさい、はっきりしてちょうだい」

「ぼくは、以前、彼女に殺された。死んで、エントランスから、やり直した。」

それだけさ」

「ジンは、人を殺したの？」

「だから、彼女も、やり直しをしてるのさ。人の生命を奪うことは、戦争か、裁判で決めた刑罰でなければ、だめなんだ。せんそう さいばん けいばつ

なぜ、その2つがゆるされるのかは、だれにも、わからないがね。いや、むろん、おもてむきの理由は、だれでも、知っているさ。ともかく、その2つ以外の殺人は、つみとが罪科だ。

ほんらいはね」

「でも、いま、変わっちゃったみたい」

「そうだね」

「リベンジするの？」

イースが笑った。

「いや。また、エントランスから、やり直したくないし」

あたし、ANKAをふりむく。

「ANKAは？」

「わたし？ わたしは、ここでは、はじめて会うわね。」

彼女は、超有名なゲーマーなのよ。

強すぎて、あいて相手がいなくてね。

本人は、じぶんのことを、戦闘神ジンが人のすがたをしてあらわれたと称して、うぬぼれているわ。

なんども、なまえを変えてた時期もあったけど、さいきんは、バトル系じゃない、こういう、ふつうのサイトに来るのよ。顔や、なまえが知られていないし、試合放棄とか、棄権とかないし（バトル系のゲームじゃないからね）。

つまり、相手は逃れられない」

「きもーい。じゃ、べつのRWサイトで、会ったの？」

「ま、そんなとこね。」

さあ、こつちも見てみよう」

右のドアをあけると、寝室で、どんなサイズのアバターが入寮しても、からだを伸ばして、よこたわれるようにと、特大サイズのベッドが5台ならんでる。

「さ、荷物整理して、食堂に集合しよう」

「寒いから、火い熾さなあい？」

「エリコ、時間がないのは、わかってるでしょ？」

クロゼットがあそこにあるわ。着替えをしまつて。

お菓子のたぐいは、くさらないように、棚にしまつてね。

あ、あれって、収納庫じゃないかしら。

旅関係の道具は、しばらくつかわないから、そこへしまおうよ。

さあ、スタート！ もう、4時20分だぞお」

ANKAの声で、いっせいに、作業開始。

整理を終えると、あたしたちは、あたふたしながら、食堂へと降りていった。

大食堂も、まるで古い教会のなかのようだった。天井が高いし、暗えーし。

窓から、外の光がさす。けど、もう、日が沈みかけているし、まわりには、高い建物が多いし、だいたい、窓のある位置が高すぎて、光がとどかない。夜かよ？って感じた。

つぎつぎと、ロウソクに、火がともされる。

火をともしるのは、白いシャツに黒いチヨキを着た、無表情な、影のような人たち。

すでに、たくさんの薪が燃えている。暖炉の数も、1つ2つじゃない。いっぱいある。もし、これが現実だったら、一酸化炭素中毒になりそうなくらい。

鐘楼の鐘の音がロウソクの炎をゆるがす。どこの鐘楼だろう？ 低い、しずかな聖歌がわき上がるように、はじまった。

「さあ、しよくん、静粛に」

だれも、さわいでねーよ、つか、なんなの。なんか、しゃべるまえから、もお、エラソーで、超キモおい。

「私が舎監のラクシャである」

白髪オールバック。顔が土いろの男がそう名乗った。

丈の長い貫頭衣の、白地のふちが黒く染められたのを着た、太ったからだ、尊大な態度。ぶさいく。

「これから寄宿舎での寮生活を説明する。

起床時間、ゴミを出す場所、暖炉のつかいかた、薪の配布場所、食事時間、洗濯の場所、図書室の利用方法、生活用品の購入、講義を休むときの手つづき、門限、各部屋のシャワーをつかうときの注意事項、就寝時間……」

説明がつづいた。

つか、エリコがポケットからビスケット出して、食べてるんですけど？

「専門講座は、それぞれ講座ごとに、場所がちがうから、オリエンテーションで、くばられたパンフレットを熟読すること。

なお」

えらい、イース。じつと、正面を見つめ、ときどき羽根ペンで、メモってる。イーグルの紋章が入った携帯用インク壺、ぶら下げて。「基本講座は、本日、しよくんらが通過した、大聖堂ウパニシャツの中央礼拝所で、おこなわれる」

ANKA、さすがだわ、ケータイに録音。

「時間に、おくれることのないように。」

遅刻者^{ちこくしゃ}は、I Eのエントランスから、やり直しとなる」

ミーシャ、なんで、そんなに眼をかがやかせているのよ、なんだか、その表情^{ひようじよう}、内容をきいてるとは、おもえないんだけど。ワクワクって、なによ？

「以上だ、しょくん。」

待たせたな。では、食事^{しょくじ}の時間だ」

やったー。

「むこうのテーブルにならべられたものを皿に盛って、食せよ」
いつのまにか、食器^{しょくき}や、食べ物の満載^{まんさい}された長いテーブルが壁^{かべ}ぎ
わにそって、用意^{ようい}されてる。

「さあ、さあ、しかたないわね、いくわよ」

エリコが急に眼ざめたように顔を上げ、立ち上がる。とても、さつきまで、なんか食べていた人とはおもえない。あたしとANKAは、笑った。

それでも、5人なかよくまとまって順番^{じゆんばん}にならび、あたしたちは、
トレーに食べ物^もを盛った。

香草^{こうそう}チキンにブルーチーズ、スパイスのきいたトマト・ソースの
かかったツナ、ムール貝^{がい}、ハーブにオリーブ・オイルたっぷり
のサラダ、バジル・ソースの Pasta、骨^{ほね}つきのマトン、パン、塩漬^{しおづ}け牛
肉のステーキ、カモのソテー、ヤギのあたまと入った野菜^{やさい}スープ、
トカゲの串焼^{くしや}き、コウモリの蒸焼^{むしや}き、イナゴ、桃^{もも}のシャーベット、
コーカサス地方^{ちほう}のヨーグルト……………

最高？だわ。ふんいきあるし、いい感じで、おいしそー。あたし、
変かな。

「ねー、このアイスクリーム、超おいしいーよお！」

席^{せき}に着くまで待てないミーシャが歩きながら、スプーンで一口に
すくって、そういった。

ザワザワする声^{こゑ}が食堂^{しょくどう}にひびく。

けど、気にしない、あたしたちは、おいしい、おいしいの大連発^{だいにんぱつ}、

会話がそれ以上になりようがなかった。

部屋にもどりながらも、しゃべりっぱなし。

イースが暖炉に火を入れる。

あたしたちは、刺繍入りの生地をはったアームズ・チェアを部屋のすみっこから持ちよって、暖炉のまえをかこむように、半円をつくり、たわいもないことをしゃべりつづけた。

午後10時になって寝なくちゃいけない時間を知らせる梵鐘が、ごーん、ごーん。なあーんか、怖えーよな、いちいち。

「ふあーあ。眠くなっちゃったねー」

って、ミーシャがからだをのばす。

「なにいつてんのよ、ガキじゃあるまいし、まだまだ、眠くなんか
ないわ」

ガキだろ、エリコ、おめーは。

「まだ、初日だし、規則どおりに就寝しよう」

そういつて、イースは、チェアから立った。

「ユリイカ、ベッド大きすぎるし、いつしよに寝ようか」

「うん、あたしも、そうしたかったんだ、ANKA」

「てか、ベッドくつつけて、みんなで寝ない？」

「あんた、ミーシャ、なにいつてんのよ、わたしは、いやだよ」

「あ、おもしろい、ベッド大陸つくろーよ」

「ね？　でしょ？　ユリイカ、おもしろいよね」

「こんな時間から、ガタガタさせて、だいじょうぶか。明日でもいいのでは」

「そうね、おもしろそうだけど明日にしたほうがいいね、ユリイカ」

「えー」

「えー」

急にエリコが立ち上がって、つかつか歩き、ベッドの脚をつかんだ。

「あー、めんどくせー。なら、とっとと、やっちゃえば、いいじゃん。とりあえず、2つくつつければ、わたしたち女の子5人くらい、

楽勝で寝られるよ」

じつは、やりたかったんじゃない、エリコ？ 素直じゃねー。

あたしたちは、力をあわせて、1つのベッドをうごかし、くつつける。ひきずったけど、たいした音は出なかった。ギギガガ……ギギ……ガガ……ギ……ガ。音はだんだん小さくなりながら、いつまでも、ひびきつづけるような感じがした……

アカデミアの夜はしずかだ。

あたしは、扉にちかいほうの、はじっこに寝た。ちと寒い。

見捨てられたような、場末っぽい位置が好きなたし。感傷的なきぶんにはたれるし、中枢でない気楽さがある。

あたしのとなりはANKA。もう、寝息になっている。スヤスヤ。彼女のむこうはエリコ。ときどき、エラそうな寝言をいうけど、そのなかにママに甘えるような言葉もまざる。

そのとなりがミーシャ。なんでだか、ときどき笑ってる。ANKAも、強い人だけど、じつは、ミーシャみたいな人が、ほんととは、いちばんポジティブな人なのかも知んない。運命愛って、そういうことなのかなあ……

窓がわのはじはイースだ。

彼女の寝息は眠っているのか、起きているのか、わからない。

外は吹雪が強くなったようで、ときおり、風が窓をゆらし鳴らして、あたしを眠らせてくれない。すごく疲れてるのに……

6 基本講座序奏…だれかいるよ…っ!?

リビングにつながる扉はあけたままにしてある。

いま……なん時なんだろう……あれ？

足音だ。

廊下を歩く音がある。なんで？

きみわるいぐらい、ゆっくりで、1歩から、つぎの1歩までの間隔が大きく、ひびきがしみこむような余韻をのこす。

なんて、ふしぎな音だろう。見まわりかしら……

あたしは、不安を感じた。いや、まち怖かった。

足音はちかづき、あたしたちの部屋のまえで……止まった！

また、このパターン？ でも、今回は、まえよりも、はつきりと、威圧を感じる。扉のむこうで、だれかがこちらをじつとにらんでいる。そのまなざしを、はつきりと感じる。

ゾツとした。からだがすくみ、かたまった。

怖くて、うごけない。

ANKAを起こしたいけど、声が出ない。

どのくらいの時間だったのか。すごく長く感じたけれど、1分くらいだったのかもしれない。

足音の主は、ふたたび歩きはじめた。音はだんだんと、とおくなつていった。

あたし、金縛りがいきなりとけた人みたいに飛び起きた。

「ANKA、起きてよ」

「ううん？ なによ、ユリイカ？」

ANKAが眼をこすりながら、からだを起こす。すでに、イースは、上半身を持ち上げていた。

あたしは、説明した。

「また？ほんとに、見まわりじゃないの？」

「だって、ANKA、この部屋のまえでしか止まらなかったよ。」

そんな見まわりつてあり？ あたしたち、しずかに寝てたじゃん。

それに、……こつちをにらむ悪意のまなざしを、すぐくはつきり感じたの！」

「ANKA、ユリイカのいうとおりだとおもう。」

見まわりでは、ありえないな」

「わかったわよ。でも、なにかなあ」

ANKAが首をかしげる。イースは、ベッドから出て、もう剣を佩いていた。

「追ってみるよ」

ANKAの顔が眼のさめた、けわしい顔になる。

「危険だよ」

イースは、冷静な表情で、

「なにも知らないことも、危険だ。」

ぼくが独りでいつて来よう」

「だめだよ、やばいし」

って、あたし。

「だね。ユリイカのいうとおり。

いくなら、わたしも、いくよ。

ユリイカ、あんた、ここで待つてなさい。

なにかあったら、あんたが舎監に知らせるのよ」

「なにかあったらって、なにがあるの？」

「そんなの、わからない」

「なにかが起こつたとしたても、ここにいて、どーやって、それがわかるのよ」

「ふんいきで判断して。」

帰って来るのがおそすぎるとか」

「やだ、ANKAがいなきや怖いし、舎監のケータイ番号知らないから、1人で、暗い廊下わたって、階段降りて、やつの特コまでいくなんてできない。」

そんなのムリ！ ぜったいつ」

「ぼくが独りでいく。ユリイカのいうことは、もつともだ。ANKAは、のこつてたほうがいい」

「あたしも、いっしょにいけば、いいんじゃない？」

あたしがそういったとたん、寝ていたはずのエリコが跳ね起きた。

「ちよつと待つてよ、ムリでしょ、わたしもいくわよ。あんたら、ひどいじゃない。こんなたよりない、ミーシャと2人だけにしているってしまふ気？ 信じらんないっ、まじ？ じょーだんじやないわ！」

イースが冷たく微笑んだ。

「じゃ、ミーシャも、つれていくんだな。」

まさか、きみは、ミーシャ独りひとをここにのこしていくのがひどいことじゃない、なんていうんじゃないだろう？」

エリコは、反論はんろんできず、ふくれっ面つらで、そっぽをむいてしまった。

ザマーミロ。あつ、いけない。クドクがまぢとおくなっている気がするう、さいきん……

エリコは、嘆息たんそくしてから、

「とっと起きおなさいよ、ミーシャ、まじ、あんた、ウザいわ」

やつあたり発見はっけん（笑）。

で、あたしらは、みんなで暗い廊下くらうかに出ることになった。

ミーシャは、ぜんぜん、眼がさめていなくて、これ、尾行びこうができる状態じょうたいか？って感じで、すっごい不安。とちゅうでつまずいたり、あくびされたりしたら、気づかれちゃうんですけどおー。

「ぼくがいちばんさを歩くよ」

「待って、わたしがいくよ。イス、あんたは、わたしたちの背後はいごをまもって。

恐いのは、うしろから、不意ふいを突つかれること。もうしわけないけど、イス、そうしてよ」

「わかった。まかせてくれ。ミーシャは、ぼくのまえをいくのがいいだろう。彼女へのフォローもつとが最もひつようだ」

「じゃあ、ミーシャのまえは、わたしが歩くしかないわねー。彼女のめんどーを見るのは、わたししかないんだからー」

エリコが急いでそういった。ずるいー。ってことは、あたしがANKAのつぎをいくことになるから、前後ぜんごに2人ずつ人がいるエリコは、いちばん安全あんぜんで責任せきにんのないポジションじゃん！ 汚きたえー。

ゆうことで、あたしたち、いくことになった。

「で、ユリイカ、足音はどっちの方向ほうこうへ消えたの？」

あたし……自信じしんねーな。

「たぶん、こっちだとおもう」

あたしは、左を指差ゆびさした。そのさきには階段がある。反対はんたいの右は

いき止まりで壁があるのみ。

「わかった。みんな、慎重にね。
いくよ」

ANKA って、すごいとおもう。なんで、こんな暗い、怖い廊下を、
ずいずいと冷静にすすめるわけ？ 篝火が照らすだけで、足下ゴツ
ゴツ、洞穴みたい……

比べて、あたしって、どーよ。

同じ人間で、この差って、なーに。

こーゆー不公平って、どーしたら解消できるわけ？

ま、無意味な問いかけだよ。

わかってる。もおー問うこと自体がダルいわ。

現実
は現実。逃げようがない。

あたしが無能に生まれたのは、あたしのせいじゃないけど、あた
しが背負う以外の選択肢は、まったく、ない。かつてにこんなこと
決められて、ムカつくけど。しかたない。

まーいや。いま、ンなことゆーてるばあいじゃないし。

そう、現実って、けつきよく、この一言、『ンなことゆーてるば
あいじゃない』だ。アー、腹立つわ！

さあ、さあ、現実
に集中しなくっちゃ!!

影が炎のせいでゆれてる。気をつけないと足音ひびくし。ミーシ
ヤわかってるかな？ あたし、おもわず、ふり返つちゃう。エリコ
が、

「なによ、しっかりまえ見てなさいよ。あんた、まじめにやってよ
ね。

状況わかってる？」

オメーがいうか？

「つせーな。わかってるよ」

幽霊屋敷より怖くて、ひざの力ぬけてる。

でも、現実世界じゃない。とり返しのかえ
つかない死にはならない。

現実の最悪なところは、とり返しがかえ
つかないことだ。かつてにそう決

められている。それがリアルのリアルさ。

ふっ、ブサイクな規則!!

ANKAの肩越しに、暗い廊下を見る。なんかめまいがしそう。

あたし、だいじようぶかな。ミーシャのこと、いつてらんない……

階段まで来た。

のぞくと階下は深淵のよう。

しずかすぎ。吸いこまれそう……

「足音は」

ANKAがささやいた。

「もうしてないね」

ギー……

「え？」

あたし、おもわず声立てそうになった。

同じく声を上げそうなミーシャの口をおさえながら、エリコがあたしをにらんで、なによ、あんたまで、って顔する。

「あれは、どこかで部屋で扉のあく音だ。どこの階だろう」
うしろからイースの冷静な声がする。

ANKAも、

「場所までは、わからないね。しずかすぎるから。

とおくても、ちかくても、同じくらいにきこえる可能性があるよ」

イースが1歩ふみ出しながらいった。

「ぼくが降りてみよう。

きみらは、ようすを見ていてくれ」

ANKAがイースの肩をつかむ。

「だめ。

ひき返そう。深追いはNG」

「あら、ANKAも、ビビることがあるのね」

エリコ、殴りたいんですけど？

けど、ANKAのほうが上手。

「そう？　じゃ、あんたにゆずるよ。

どうぞ、いってちょうだい」

エリコが必死^{ひっし}になつて、

「なにいつてんの、わたしは、ミーシャのめんどろを見なくちやいけないし」

うぎ。あたし、がまんできなくって、

「エリコ、声荒^{こえあら}げてんじやないよ、状況^{じょうきよう}わかってる？」

エリコがにらみ返す。闇^{やみ}でもキラキラする眸^{ひとみ}。そのとき……

ギ、ギ、ギー、ボタン！

あたし、まぢ心臓止まりそうだった。ドアのしまる音じやない？

ANKAが小さなため息^{いき}をつく。

「ひき返^{かえ}そう。

どこかの部屋^{へや}に入った。これで、もう、わからないよ。だって、ぜんぶの部屋^{へや}をあけてしらべるわけにはいかないし。

さあ、もどろう」

あたしたちは、部屋^{へや}にもどろうとした……あたしは、そのつもりだった。

いちばんうしろにいたイースが、こんどは、いちばん先頭^{せんとう}になる。

あたしとイースとのあいだには、エリコとミーシャとがいるけど、そのエリコが、

「イース、なにしてんのよ。突^つ立^たってないで、はやくいこーよ」

こたえない、彼女^{かのじょ}。

なんで？

あたしも、なにかいおうとしたけど、うしろのANKAがあたしの肩^{かた}をつかむ。あたし、おもわず、

「え？」

「ユリイカ、まえを、よく見て」

あたしは、闇^{やみ}にかすかに見えるイースのあたまのむこうを凝視^{ぎんし}した。

「なにしてるんだ？ おまえたち」

太^{ふと}った大きな男。あたし、びっくりして飛び上^あがりそーだった。

「消灯時間は、とつくにすぎておるぞ」

舎監ラクシャ、もし、あかるければ、その白髪はくはつのオールバックもわかっただろう。しわのきざまれた尊大そんだいな顔も。最悪さいあくだわ。

「いったい、なにをしていたんだ」

あたしは、正直しやうじきにいうべきか、まよった。ANKAの顔をのぞく。こういうとき、エリコは、おとなしいよね。

ANKAが1秒びようで考えをまとめようとしていたけど、それよりさきに、イースが口をひらき、

「部屋で寝ていました。」

ぼくたち全員ぜんいんが、です。

足音がして、ぼくらの部屋へやのまえて止まりました。

不審ふしんにおもったので、追跡ついせきしたのです」

ラクシャが眉まゆを上げるのが見える気がした。

「全員で追跡ついせきかね？」

こんどは、ANKAがしゃべりだす、

「だれかをのこすのは、危険きけんだと考えたんです。

5人そろって、うごいたほうが安全あんぜんだと考えたんです。

セキュリティについては、あなたがたに責任せきにんがあるのではないの

ですか。わたしたちの部屋のまえて立ち止まって、ようすをうかがっていた不審人物ふしんじんぶつについて、なにも把握はあくしていないことのほうが問題

だとおもいます。

規則きそくをやぶったかもしれないけど、セキュリティの不備ふびのせいで、自衛じえいせざるをえなかったからです」

そーそー、そーだよおー。ANKA、あたまいいー。

「足音は定例ていれいの見まわりだ。問題などない。ありようがない」

「なんで、わたしたちの部屋へやにだけ立ち止まったんでしょう？」

「起きている気配けはいを感じたのだろう」

動揺どうようから復活ふっかつしたエリコがしゃしゃり出て、

「寝てたわよ。」

そりゃー、ユリイカとかがふとんのなかで起きてたかもしれない

けど、sonで足止めるって、変じゃない？ なら、どつかほかの部屋のまえにも、止まってなくちゃ、おかしいじゃん。

ふとんのなかで起きてる人なんて、ぜったい、ほかの部屋にもいるよ、そこでも止まなくっちゃおかしいじゃん、わかんねーの、そんぐらい！

なんで、わたしたちのとこだけなのよ？ こたえられるもんなら、こたえてごらん」

「起きていても、足を止めるか、どうかは、ケース・バイ・ケースだ。

おまえたちのばあいは、たまたま、結果的にそうなったただけだ。それから、セキュリティについていえば、寮生活管理のばあいと、サイト自体のセキュリティのばあいとがある。

とくに、新規ユーザーに関しては、サイトのセキュリティが働く。とうぜんだ。ウイルスをはこばれては、たまらんからな。

サイトからのセキュリティにひつかかって、チェックを受けているのであれば、わしの関知するところではない。異議があるなら、管理者に確認しろ。わかったか？

まあ、どっちにしろ、今日は初日だから、赦してやる。さあ、寝るんだ。

明日は、よび出すかもしれないけどな」

はあ？ なんでよ。

部屋にもどった。

あたし、ベッドにドスンと、あおむけにたおれる。

「明日、ほんとに、説教する気かなあ」

ANKAは、気にせず、

「基本講座は受けさせるだろうから、もしあるとすれば、夕食時かな。どっちにしろ、本質的な問題はない」

部屋にもどってから、あたしたちは、そんなふうに、ちよっと話しあった。疑問がわく、

「なんでラクシャの気配に気がつかなかったのかなあ。あたしや、

エリコなんかは、ともかく、イースまで」

「なによ、あんた、かつてに、わたしまで同類にしないで」

だまって窓の外を見ているだけのイースに代わって、ANKAが、
「ラクシヤは、環境的な人物だもん。」

わたしたちは、じぶんの眼や、耳で、見たり、きいたりしているつもりだけど、じつさいは、システムによつて、提供された情報を感覚しているだけなのよ。

そのシステムは、いつだって公平に、情報のすべてを、わたしたちに提供してくれるべきなんだけど、管理者が、意図的に、そのシステムをコントロールするばあいもあるのよ。今回みたいに、気がつかなかった、なんてことがあっても、ぜんぜん、ふしぎじゃないわ。

管理者が舎監をそういうことのできる存在として設定しておくか、その瞬間だけ、それができるようにしておいてやるかすれば、いいのよ。それだけで、舎監は、わたしたちに気がつかれずに、背後にまわることができる。

あたえたくない情報をあたえないことも、ありもしない情報をあたえることもできる。ほかのユーザーが見ることもない、標準の設定にはない現実を、わたしたちだけに見せるってことだってできるのよ。直接入力で、感覚をコントロールできるから、なんでもできる。

管理者サイドからなら、なんでもありなんだよ」

「神出鬼没な、あのバリエースのうごきと、同じってわけね」
ミーシヤが不満げに、

「なんで、わたしたちなのお、つけまわしてー？」

「知らないわよ」

っていつてから、エリコがこんどはあたしにむかって、いう、
「ユリイカ、あんたってば、なんか、最悪なウイルスでもくつつけて来ちゃったんじゃないの？」

「ちよっとー、なんで、あたしって、決めつけるわけ？」

イースがさえぎるように、

「さあ、眠ろう。」

今晚、ぼくたちにできることがあるとすれば、それしかない」

あたし、眠れないとおもった。いろいろ、しんぱいで、どうてい、

眠れない、とおもった。でも、気がついたら爆睡（ばくすい）（笑）

あれ、眠ってたんだ、あたし、ってゆー朝（あさ）だった。

あー、よく寝（ね）たわ。

雪（ゆき）、やन्दる。

太陽（たいよう）が東（ひがし）の空から顔を出す、朝（あさ）5時。日本の冬じゃありえない。

こういう設定（せってい）だから、しょうがない。屋根（やね）の白雪（しらゆき）が黄金（こがね）にかがやいている。

きれいすぎるわ。女優（じょゆう）ライトをあてた金泥（きんでい）みたい。

あたしは、飛び起きて顔を洗（あら）った。こんな積極（せつぎよく）的な行動（こうどう）、現実（げんじつ）の世界（せかい）にいたときは、ありえなかった。ミーシャが寝（ね）ぼけ眼（まなこ）でベッドから身（み）を起こ（お）す。エリコ、まだ寝（ね）てるし。性格（せいかく）もわるいが寝（ね）起きもわるいのかよ？

ANKAは、鏡（かがみ）のまえで髪（かみ）をとかしながら、あたしにきく。

「5時半（しよはん）くらいに、食堂（しょくどう）へ、いけるかな？

7時に始（し）業（ぎよう）だから。

たぶん、6時半（しよはん）くらいに席（せき）に着（つ）かないと、5人（ごにん）いっしょには、いい席（せき）に坐（すわ）れないよ」

「あたしは、だいじょーぶだけどさー」

そのときイースが扉（とびら）をあけて、部屋（へや）に入って来た。

「いい天気（てんき）だ。」

食堂（しょくどう）は、もう、なん人が来ていたよ。階段（くみ）でも、なん組（ぐみ）かすれちがつたし」

そのとき、ふとんを持ち（も）上げるガサガサした音がする。

「ふあーあー。なによお、あんたたち、ずいぶん、はやいじゃん。

ふあー。

ふんと、早（はや）すぎるよ。なにしてんのさあー。ふあーああ」

「エリコ、あんた、いーかげんにしなよ」

「ふあ、朝あさから、うっさいよ、ユリイカ」

まぢギレ寸前すんぜんなんですけど？

どうにか、大食堂だいしょくどうへ、降りていけたのは、5時50分くらい。もう、人がいっぱいだった。

A N K A が、きっぱりいう、

「いい？ みんな、まよってないで、さつさと、皿さらに盛もって、テーブルに着つくのよ！」

あたしたち、速攻そっこうで食べてから、部屋へやに駆けもどり、身みじたくして、6時半には階段をころがりおちるように降りて、外そとへ飛び出す。

雪凍こおってて、足すべらず。

「走らなきゃだめなのー？」

「いやなら来るな、エリコ」

「あいかわらずウザいねー、ユリイカ」

歩いてるアバターもいれば、あたしたちみたいに走ってる組もある。せまい雪の路地ろじを、ともかく、ころばぬよう気をつけながら、あたしたち、走る走る走る。

垂直すいちよくな石造建築せきぞうけんちくのはざま、たてにほそい谷間たにま。その終わりに、柱廊ちゅうろうの一部が見えてきた。この谷間にいてさえも、そびえる大聖堂だいせいどうの偉容ようは、白嶺はくれいのチョモランマみたいだ。ちかくても、離はなれていても、変わらない。

晴天せいてんに見る大聖堂もまた、圧巻あつかんだ。曇天どんてんの下で見る、せまるような威圧感いあつかんとはべつの、神々こうしやうしい威圧感がある。

すげえーすごすぎるよ。昨日きのうより、高く見える。蒼穹そうきゆうに伸び上がるように見える。

柱廊ちゅうろうの円柱えんちゆうの列をぬけ、広場ひろばに出て、大聖堂を目指めざす。

あたし、腕うでのケータイ見た。6時40分。きやー。

聖堂せいどうの正面では、12段のひろい階段が肅然しゆくぜんとして、来る者ものをむかえている。

入り口は7か所あった。まんなかに3つ、身廊しんろうに入る大アーチと

2つの中アーチだ。身廊の左右に側廊が建築されていて、それぞれが小アーチを2つずつ持っていた。

どこも混みあっていた。いやーだ。

「どこから入っても同じだな」

というイースの声に、ANKAがこたえて、

「では、同じというなら、いちばん大きな中央口から入ろうよ。

大真理に見えるんだから、直球でいこうじゃない」

外界は太陽光が雪に乱反射して、光にあふれているのに、大聖堂は静粛、うす暗かった。

壁の高いところにあるステンドグラスの窓に、黒くて太い輪郭で、青いマントや赤い帽子の人物や、神聖な大樹や、動物や、鳥たちの登場する聖なる物語が画かれている。

そこから、崇高な光が深厳にさし、永遠の問いかけがくり返されている。「宇宙は無限なのか」「愛は最も尊いのか」「なぜ非存在があるのではなく、存在があるのか」

見上げる天井の穹窿がはるかとおい。

聖人の彫像や物語を彫った彫像群、聖句をかたどる巨大な嵌め細工や、側廊に沿って列しているいくつもの礼拝堂、大きな円柱、飾られた壁龕。

屋内に天蓋がつけられ、その下に設置された、建物のなかの建物ともいうべき、壮麗な伽藍があり、そのなかにも、荘厳な祭壇がそなえられ、聖歌隊の席がならび、地下へ降りる階段がある。ちなみに、これが大聖堂の中央部にあたらしい。

そのさきに、受講者たちの席のならば空間があった。

あたしたちは、人を（アバターを）かきわけ、あたしたち5人がまとまって坐れそうな場所を、さがした。

「あー、あった。うそみたい」

意外なことに、見つけたのは、ミーシャだった。

大急ぎで坐る。イースは、超然としていたけど……

あたしたちが坐ったのと同時に、聖歌が地からわき上がるように、

しずかにおごそかにひびきはじめた。あたし、なんだか感動した。
ミーシャも、

「あー、すごい」

天井てんじょうからつるされた、大きな香炉こうろから、香氣こうきがあふれ出す。

エリコも神妙しんみょうな顔だ。

金箔きんぱくの貼はられたアイコンがロウソクの光にゆらぐ幽玄ゆうげん。

イスが頭こうべをしずかに少し下げる。

気持ちかが、空気が切り替わる。

鐘楼しょうろうの鐘かねが街まちを祓はらい浄きよめるよう、鳴りひびいた。

ANKAの頬ほほが紅潮こうちょうしてる。

聖せいなる管奏楽隊かんそうがくたいのラッパが吹奏すいそうされた。

いつのまにか周囲しゅういは祈祷師きとうしであふれていて、いつせいに聖句せいこが唱となえられ、浄化じょうかされる。

壇上だんじょうに、まずあらわれたのは、ハーロック局長きょくちょうだった。

「基本講座きほんこうざにさき立だって、これから賞讃しょうさんの義ぎを叙のべる。なぜなら、
真実しんじつ、善ぜん、正義せいぎは、美だからである。有益ゆうえきで、実用的じつようてき、実践的じっせんてきで最もつと
も現実的である。たたえて、いわく、

『正義が真実である。』

真実が現実である。

正義でなくば現実的ではない。

神が我々にそのように生きるよう命めいじ、魂たましいをあたえた。

それゆえに、我々は、そのように感じる。

ならば、我々は、

神にあたえられたままに、

そのように信じ、そのように生きなければならぬ』

すばらしき聖句せいこである。ウオツホン！

さあ、では、本日ほんじつはしょくんに、真実とは、なんであるかを紹介しょうかい
しよう。

しよくんが、いま、眼のまえに見ているこの祭壇こそが真実の中
枢、聖域のなかの聖域、聖域の中枢である。

よって、まずは、この聖堂を司教座とする大司教イタルから開講
の祝辞をいただく」

帽子も長衣もすべて白い、血の気のない蒼い顔の少年があらわれ
た。髪の毛のいろがクリムゾン・レッドで、大動脈から噴いたばかりの
生々しい血のような、ぬれた緋いろ。

痩せていて、眼には表情のない焦燥、狂犬のような、滾った虚ろ
さがある。顔の左のはんぶん、青い文様のようなものが入っている
ように見えた。けど、とおいし、暗いし、よくわからない。

エリコがとくいげに、あたしの耳にささやく、

「彼はね、自由意志設定のアバターなんだけれど、もともとは、ユ
ーザーが操作していたんだけど、そのユーザーが操作をやめて、自由
意志設定にしたまま、死んじゃったの。」

有名な話よ」

「え、死んじゃったの!？」

「そうよ。」

そして、自由意志設定のアバターだけが永遠に活動しつづけてい
る」

「そんなあ……。なん歳くらいだったの、アバターは、あたしたちぐ
らいに見えるけど……」

その問いに、ANKAがこたえてくれた、

「17よ。」

『v v w』ってバンドのヴォーカルだった。

(v v wとは、Very Very Well-done の略。これをクワドルプル・ヴィ Quadruple
v「4倍のv」とよぶのは、wはvが2つであり、ぜんぶでvが4つあると考えるか
ら。ちなみに、Well-doneは肉の焼き加減をいうときなどにつかうエルダンと同じ
で、よく焼けた、転じて、容赦ないハードなサウンド、であることを意味していたが、
のちに予言的な意味にも解釈されるようになった)

ガソリンかぶって焼身自殺したの」

「・・・つ、信じらんない。なんで？」

あたし、壇上だんじょうとエリコとを、交互こうごに見る。

イスがいった、

「死んだ場所っていうのが、その地方で聖域せいいきとして崇拜すうはいされていた
真神山まがみやまという、山の頂上ちようじやうだったらしい。

いくつかのブログや、スレッドでいわれていることだから、事実
だとおもう。

そこには、御神体ごしんたいといわれる大磐おおいわがあつて、縄文時代じようもんじだいの祭祀跡さいしあとが
のこっていることでも、知られていた」

焼身、神の磐、まだ17で・・・なぜ？

衝撃：。胸さわぎみたいな動揺。あたまから、離れなかった。イ
タルをリアルに感じた。そのまなざしを。どこから、見られてい
るかのように・・・

ANKAがさびしく微笑びしょうし、

「けど、彼は、いない。設定せつていでうごくアバターだけが虚むなしくうごい
ているだけよ」

すると、エリコがとくいげに、

「あーら、そうかしらー。わたしたちも同じようなもんじゃねー。
ムカつくこといわれると、自動的じどうてきに怒りいかがこみ上げて。

これ、自由意志設定じゆういしせつていと同じだよ・・・ねっ、ユリイカ」

ミーシャが壇上だんじょうを指さし、エリコの袖そでをひっぱる。

「ねー、きこうよ、わたし、ききたーい、イタルう」

永遠えいえんに17歳の大司教だいしきやうイタルは、語りはじめた。

意味など知らず、設定せつていされた言葉ことばを、設定せつていされた感情かんじやうでいって
るんだ：。。。なんかふしぎな、神妙しんみやうな気持ちだった。

あたしたちも同じ、かあ。さいしょ、ちよつとムカついたけど、

そうかもしれないね・・・

「すべての生命せいめいは、超越ちやうえつを志向しこうする」

意味、わかんない。

あたしだけじゃない、ミーシャもわかんなくて、ANKAにきい

てる、

「ねー、シコウって、なに」

「なにかを目指すことよ」

あたしも、きいた、

「生命せいめいが超越ちようえつを目指すって、どういうことなの？ てか、超越ちようえつって、わかってるよーで、わかんないし」

ANKAはささやく、

「だまって、きこうよ」

イタルは、表情ひようじようのない、まっ蒼さおな顔で語りつづけている。

「海で生まれた生命せいめいは、より強く美しく生きるために魚へ進化しんかした。また陸上りくじようへ上がり、乾燥かんそうに耐える皮膚ひふをつくり、大地だいちを自由に駆かけた。

またべつの生命せいめいは、皮膚ひふを羽はねに変えて、蒼穹そうきゆうを自由に舞まった。

過去かこのじぶんを捨てて、より高度こうどな未来のじぶんへと進化しんかした。過去かこのじぶんを超越ちようえつして脱却だつきやくし、より高度こうどに進化しんかした。新しいじぶんになった。

より強く、より高く、より高度こうどに、より大きく、より複雑ふくざつに、より精緻せいちに、より美しく、脱自だつじ（エクスタシス *ékstasis* *ek-*外そとに＋*stásis* 立つこと）し、延長えんちよう（エクステンション *extension*）・拡大かくだい（エクスペンション *expansion*）しようとする。

これがすべての生命せいめいの基本原理きほんげんりである。すべての欲よく、すべての意思いしの源泉げんせんである。この志向しこうが生命せいめいの、いや、存在そんざいの意志いしである。

以上。

つぎは、学長がくちようイクシヴァーンからの基礎哲学講義きそてつがくこうぎだ」

あたしたち、魂たましいがぬけたようになっていた。いや、ANKAやイスは、そうでもなかった。でも、少なくともあたしやミーシャは、彼の言葉の意味にカンケイなく、存在そんざい感かんっていうか、オーラっていうか、ふんいきに圧倒あつとうされていた。夢に見そうだ……

鐘楼しょうろうの鐘かねが鳴りひびく。

聖歌隊せいかたいの讚美歌テ・デウムが霧きりのようにわき上がる。

大理石の円柱は巨大な木のように、苔生す老樹の森厳な空気がただよう。

講座の開始を告げる梵鐘が鳴らされ、香炉が大きくふられ、天井から蓮の花びらが雪のように舞いおちてきた。

颯爽？と、学長が壇上に立つ。

7 イクシュヴァーン学長、哲学真髓をかく語りき。

イクシュヴァーンは、まだ若い（つても30歳くらいか）、まなざしの深い人だった。

深紅の貂の毛皮のローブをまとい、ひきずり、シルクの貫頭衣の襟や袖のふちには金燦糸の刺繍がなされ、長い髪 of いろいろ絹糸のように真っ白だった。

「ここでは、しょくんに、現実世界では、永遠に失われたものを学んでもらおう。

それは、たとえば、『真実』です。

さあ、ところで、どうでしょうか。あなたがもしもスレッドに、真実なんて言葉を一言でも書きこんでみなさい。たちまち、うざい、キモイとさげすまれ、嘲笑愚弄、たたきの嵐になるでしょう」

そーかなー。

ぜんぶじゃないけど？

「ネットの世界は、匿名性のシールドにまもられ、透明人間のように、だれにも知られず、見られず、たしなめられもしない。そのとき、人は、悪意のかたまりです。なにかをもを怨み、憎んでいます。

本性をあらわにし、本音を吐露しているのです。

しかし、そのことはよいことではないとはいえ、真実という言葉が批判されるのは、やむをえないことでもあるのです。

真実には、なんの効きめありませんから。

科学的な、物質的な真実以外は見むきもされません。実用的ではないからです。実用むきなものは、真実というよりは、事実とよぶべ

きでしよう。私がいおうとする真実とは異なります。

私のいう真実とは、じぶんが真実を生きているという、自信と氣力りよくとに満ちた感覚かんかくのなかにあることです。

それは、じつに幸福こうふくな感覚ともいえましょう。

しかし、真実を生きようとすれば、現実生活においては、損そんをす
るばかりです。虚むなしく身を滅ほろぼしてしまうでしょう。

真実には、なんの実用性じつようせいも、効能こうのうもないからです」

イクシユヴァーン学長は、言葉を止めて、しずかに、あたしたち
をながめた。しずかな湖みづうみの深さの、まなざし。

「しかし、人は、幸福しあわせを求める存在そんざいです。飲ようこびを求める存在そんざいです。

これは、第1の公理こうりです。

もし不幸ふこうを求めると称しょうする人がいたとしても、その人は、それによ
って、こころの納得なつとくを見出し、欲求みだを満たし飲ようこび、幸福こうふくをえてい
るのです。

幸福しあわせとは、むしろ、存在そんざいそれ自体じたいといつてもよいものです。すべ
ては、幸福こうふくへの追求ついきゅうから生しょうじたものだからです。だれも例外れいがいではい
られない。

ならば、真実しんじつという感覚かんかくのなかにいられる方法ほうほうを1つの趣味教養しゅみきょうよう
として、知っておくことも、無益むえきとはいえないでしょう。

では、そのためにひつようなものとは、なんでしょう。それは、
正義せいぎです。

自らが正義せいぎであれば、こころは充たみされているでしょう。
愧はずべきことがなければ、こころかるく、懼おそれなく、氣力きりよくはみち
あふれ、たのしいでしょう。

しかし、現実げんじつというものは、正義をつらぬく者ものにつらくあたりま
す。

だから、こころの弱い者は、現実げんじつにこびへつらい、迎合げいごうし、正義
を嘲嗤あざわらい、悪あくに走る。

そのほうが伶俐りこうだと自慢じまんするのです。金かねがすべてだと、うたうの
です。

そして、真しんの幸福こうふくからますます離はなれていく。離はなれていくから、ま
えよりも、さらに幸福こうふくに飢うえ、渴かわく。さらに強しゆうじやくく執しやく著しやくし、金かねや、物もの
や、権力けんりよくや、色情しきじようを追求ついきゆうする。求もとめて終おわることがなく、永遠えいえんに渴かわ
き餓かつえつづける。

真しんの幸福こうふくとは、なんであるかを知る叡えいち智ちがないから、このような
ことが起おこるのです。

叡えいち智ちがないとは、なんと悲かなしいことでしょう。

では、こんどは逆ぎやくに、しよくんが叡えいち智ちにもとづいて、現実げんじつのなか
で身みを犠牲ぎせいにし、損得そんとくをかえりみず、正義せいぎをつらぬいたとしたなら
ば、どうなるでしょうか。

ただ、損そんをし、つらいめに遭あいます。

それだけです。

それしかありません。

しかし、こころは満みたされ、清爽せいそうで、さわやか、かるらかな氣持
ちで、しあわせを感じるでしょう」

イクシュヴァーンは、ふたたび言葉を止めて、しずかに、あたし
たちをながめた。

またも蒼あおい湖みずうみの深さの、まなざし。

「さて、もう1つ、真実しんじつを生いきているという感かん覚かくのなかにいられる
ためにひつようなもの、それは愛あいです。

しかし、愛あいは、かなうことがありません。ただ、失うしなうのみです。
すべてがムダに終わります。

どのように誠実せいじつな愛あいであっても、相手あいての求もとめるなにかがなければ、
かえりみられることもありません。それは好このみとか、タイプとかい
う言葉で表現ひようげんされますが、とてもあいまいで、いいかげんで、理不りふ
尽じんです。

そのような理不りふ尽じんな理由りゆうで、人を選別せんべつすることは、残酷ざんこくですらあ
ります。

ちがうでしょうか？

むろん、ちがいません。

考えてみてください。

どんなに誠実で、こころのこもった、自己犠牲的な愛であっても、好みでなければ、迷惑がられ、あげくの果てには、キモいといわれ、ウザいといわれ、疎ましがられ、避けられてしまうのです。

非情な行為といわざるをえないでしょう。

けつきよく、恋愛の成就是運命でしかない。善良さも高潔さも、なんの関係もない。

恋愛とは、運命という名の弱肉強食、獣の世界です」

学長は、嘲りの笑みを泛かべている。

あたし、涙がながれた。

そっかあ、愛はかなわないもの。愛はむくわれないもの。まちで、そおだおー。グスン、グスン……理屈は、ちよつと、きよくたかなとは、おもったけど……

イクシュヴァーンは、言葉をにつづけた。

「それが現実です。

現実世界がどんなに理不尽で非情であるか、どんなに不実で道に外れているか。

しかし、I E では、そうではない。

正義をおこなう者には、繁栄と栄誉がもたらされ、栄耀栄華があたえられ、富み栄えることができます。

愛にはむくいがあります。

哲学が崇敬され、侮られることがない。

おろかな価値観が専横する現実世界とは、異なります。

力だけが支配する現実の世界は、不幸です。軍勢力や、経済力、狡猾さや、強かさが支配する現実世界は、不幸です。

なぜならば真の魂を、真の生命を喪っているからです。

生存することが生命なのではない。

富や権力のために、罪のない弱い者たちをあざむき、くるしめ、力をふるうおろかな者たちは、じぶんたちがすでに生命を喪っていることに気がつかない。

しかし、彼らに即刻、罰をあたえないことにも問題がある。罰がなければ罪がないと誤解する者がいても、ふしぎではない」

んー……めんどくさいなー。

現実わ、きらいだけど、かたつくるしい話もきらいだお……

イクシュヴァーンは、おおげさに髪をふる。

「しかし、ここでは、そうはいかない。

世俗的な価値に左右され、欲望を貪り、生まれて来ないほうが良かったような、獣同然の人間ども、彼らは、このIEでは、永劫の罪を背負って、止むことのない罰を受けます。

真実と、正義と、愛とをつらぬく者は、永遠のむくいを受けます。

栄光の頂点に立ちます」

1人の少年が立ち上がった。

外人だ。ヨーロッパっぽい？

まっすぐで、あかるい髪の色、太陽のような高貴な顔立ちで、あたしたちと同じくらいの歳だろうとおもうけど、知的で、凛々しい。

「では、イクシュヴァーン学長、いったい、どうすることが正義でしょうか。

どうすることが愛なのでしょうか」

学長は、よどみなくこたえ、

「それは、じぶんを超越した行為です。

たとえば、自らの死を怖れず、自らの損得をかえりみず、権力や、金持ちや、暴力組織に立ちむかうことです。

たとえば、他人を愛し、自らを犠牲にする超越的な行為のことで、けがれなく、他者を愛することは、自己の超越なのです。

正義のために死すことは、幸福です。ここに一点のくもりもない。蒼穹のように自由です。

こころは、つねにさわやかでかく、澄み切っているでしょう。わかりますか。

私は、実用的で実践的な話をしています、これが真のリアルであ

って、人々が追い駆けているものは、実体のない幻です。

しよくんは、私を夢見る者というかもしれない。しかし、だれもがほんとうは、それを求めている。

いや、もし夢であつても、夢とは、現実を超越するための、人間の精神の翼。

その自由を、だれも奪えません」

学長は、沈黙した。聖なる沈黙だ。

イクシュヴァーンは、背をむけ、うしろの大祭壇を見上げ、胸に手をおく。

そびえる祭壇は段をなし、山のような、大神偉をあらわにする。その祭壇の背後には、繁褥な彫刻に荘嚴された衝立がそびえていた。

その頂上には、金でつくられたIとYとEの3つの文字が1つの文字のようにかさねられ、円形の炎のなかで、かがやく。

ANKAがあたしの耳にささやいた、

「あれが聖なる象徴よ。」

神聖な原理、世界宇宙の原理、この世をささえる究極の真理の象徴なのよ。

イデア山が同じかたちをしているっていったでしょ。それがあのIYEの頭文字のIよ」

ふたたび、彼は、こちらへむき直り、演壇から1冊の本をとり上げた。

「この本は聖典『kOO（空）』のコピーです。

オリジナルは世界に37冊しかなく、そのうちの1冊がここ、ウパニシャッド大聖堂で聖櫃におさめられ、保管されています。

世界の25の大都市、7か所の聖地に1冊ずつ、そして、ここアカデミアに5冊あります。

あとで、大聖堂で保管している現物も見てもらいますが、いつも見ることができるように、わたしがいま、手にしているものと同じコピー（写本）を、1冊ずつ、しよくんにあたえます。

聖堂の出入口でいりぐちにつんでおくので、わすれずに持って帰りなさい。

これで講義は終了こうぎ しゅうりようです」

その声と同時に、鐘楼しょうろうの鐘かねが高らかに鳴なった。

蓮はすの花が雨のごとく降り、香かうの匂においとともに、聖歌隊せいかたいの神聖しんせいな調しらべ

がひびきはじめる。

またハーロック事務局じむきょくちよう長なががあらわれた。

「さあ、さあ、これから『koo』の原書げんしょを見てもらう。

前列ぜんれつの者ものたちから順じゆんにこちらへ。

聖の聖なる原書げんしょは祭壇さいだんの下したの地下室ちかしつ、聖堂せいだうの心臓部フリダヤにおかれてい
る。

さあ、来るがよい」

みちびかれるままに、祭壇さいだんのほうにいく。いってみると、なるほ

ど、大祭壇だいさいだんの裏うらに、半円はんえんをえがくような感じの通廊つうろうがあつた。

祭壇さいだんをかこむようになっている。

「そこだ。その通廊つうろうをいくがよい。いけば、祭壇さいだんの地下ちかに入る扉とびらが
見つかる。扉とびらはあけたままにしてある。

階段かいだんがあるから、それを降りよ」

長い列れつができた。なかなかすすまないからだ。あたしたちは、足
ぶみするみたいに歩いた。

あたしたちは、ANKA、エリコ、ミーシャ、あたし、イースの順じゆん。

「あ」

って、小さくさけぶミーシャ、ふりむいたエリコが、

「なによ」

「ね、あれって、ジンよ、ジン・メタルハート」

たしかにいた。あたしたちが祭壇さいだんのまえに、さしかかろうとする
とき、祭壇さいだんのうしろの通廊つうろうに入いって、見えなくなろうとしている彼

女のシルエットが。

尊大そんだいで鉄アイアンのような女。

あたしたちは、ようやく祭壇さいだんのうしろの通廊つうろうをまわって、扉とびらの見
えるところまで来た。

ひらいたままの扉とびらのさきには、奈落ならくへおちるような階段がつづいている。まっ暗くらだ。

「怖いんですけどー」

ミーシャがさげんだ。

「はやく来なさいよ、あんた」

エリコは、そういうが、たしかに、ちよつと怖い。いざ降おりてみて、はじめてそうおもった。手すりにすがるけど、冷つめたいし、さびてる。わっ、さびが手にー。さいあくー。

足下あしもとくら暗くて、段だんがよく見えない。

ほんとに長く感じたけど、たぶん、20段と少しくらいだとおもう。階段の終わりがよくわからない。エリコがつまずく。あたしは、それ見て（感じて？）、気をつけたので、すんなり着ちやくち地。ラッキー、かな？

あー、そんなことおもっちゃ、だめえ。

クドク、クドク。自己超じこちようえつ越しなくっちゃ、いくらエリコがきらいでもねー。

ここは、少し明るい。

獣脂じゅうしの燃える独特どくとくの匂においがしてた。ランプの傘かさに、聖人の彫像ちようぞうがあった。クモの巣すと、ホコリだらけだ。光が少ないわけだ。

着ついた場所は、地下ちかのフロア、っていうより、ただの小さなスペース。

つぎに、右に曲まがって、まっ暗くらな廊下ろうかへと、つづいていた。

ANKAがその暗闇くらやみに消きえていく。

石の冷たさが空気を通じてわかる……

なんか、厳肅げんしゆくなふんいき。大きな声なんか出せない感じ。あたし、小さな声で、ケータイつかって、ANKAにきく、

「どうなの、ANKA」

彼女がいう、

「すごく暗くらいから。気をつけて。石の組みかたがあらくて、床ゆかがデコボコしてるよ。

手すりにつかまるのわすれないで」

「手すりあるんだ？ それ、さいしよにさがすよ。で、どんな感じなの？」

「まっ暗^{くら}だけど、あつ、あかりが見えるかも。

ちよつとおー！

エリコ、めんどくさいから、わたしの裾^{すそ}つかむのやめてくんない？」

「なによ、ちよつと、さわっただけじゃん、ANKAのケチ」

エリコの声だ。

「怖いよ、エリコ、あなたのからだにつかまっていいい？」

ミーシヤか？

「うざいわねー、さわんないでくれる？」 ……エリコ。オメーつて、やつわー。

そうおもいながらも、すすめば、あたしも闇^{やみ}に浸^{ひた}る。

手すりはすぐにわかった。でも、まっ暗^{くら}だから、少しずつしか歩けない。

廊下^{ろうか}は曲^まがっているみたいだった。

あかりが見える場所まで、とおくはないはずなのに、なかなか着かない。

けど、それは数十秒のことではなかった。

あかりは小さな部屋^{へや}からもれていた。ああ、よかった。

聖^{せい}なる部屋。

廊下^{ろうか}の左がわにつくられた小さな部屋^{へや}で、入り口の上に、文字が

書かれていた。

あたし、ケータイの翻訳機能^{ほんやくきのう}で読んでみる。

『真実奥義^{しんじつおうぎ}の精髓^{せいずい}のその心臓^{しんぞう}』と書かれていた。

さらに入り口の左右^{さゆう}には、むきあうように、2人の僧侶^{そうりよ}のレリーフがある。

中国の僧侶^{そうりよ}っぽいけど、レリーフのふんいき、つか感じは古代エジプトっぽい。

入口を守護^{しゅご}する知恵^{ちえ}の守護者^{しゅごしや}がレリーフの意味^{かいせつ}を解説した。

「彼らは、龍峯寺の僧、眞巖と、弟子の龍鳳です。
この2人はつぎのように語りあっています。」

眞曰、文趣眞奚焉にしあるとも、究竟也

龍曰、卷子皆同じう究竟を云か

眞曰、佳文究竟の所以

すばらしい会話です」

「わかんないよー」

「つまり、こういうことです。」

眞巖がいった。

『この本の内容がどんな内容であろうとも、その内容は、究極の真理をかんぺきにいいあらわしている』

すると、龍鳳は、たずねた。

『なにが書いてあっても、究極真理ですか。師よ、それなら、どんな本であっても、究極の真理が書いてあることになってはしまいませんか』

眞巖は、満足げに、大きくうなずいて、こたえた。

『そのとおり。』

それこそこの本がほかの本に勝ってすぐれている特徴なのだ』
どうですか、すてきじゃありませんか！ すばらしい。

その本こそが、これからごらんになる『kOO』です」

「少しも、わかんない！」

ま、いーや。

あたしも、はやく入ろー。みんな、どんどん入って、どんどん出てくる。ゆつくりは見ていられないようだ。

入った。

4人の衛兵が部屋の四方を護っている。

選りすぐられた、精鋭中の精鋭にちがいない。

精巧な細工が施され、まぶしさのはんぱじやない黄金の甲冑、装

飾的な流線をえがくデザインは実戦むきじゃない。細部まで緻密な造形が奢られ、聖なる神句が神聖な文字で浮き彫りにされていた。

解説を仕事とする僧侶、解説僧が1人立っている。

けど、あたしは、すぐに、ちがうことに氣をとられた。

ふしぎだあ。地下なのに。だって…………

エリコがいう、

「なんかさー、空気がさわやかじゃない？」

そう、あたしも、そうおもった。それなのに、なにこれ…………

「ほんと、なんか、気持ちいいーおね」

ミーシャのいうとおり。きよらかな小川がながれる、夜明けまえの森みたい…………、でも。

「これだよ、見て」

ANKAがいう。

あたしも、ミーシャのあとから歩みすすんだ。

部屋の奥にある、大きな聖櫃。

とおもったら…………なんてことなのよ!?

まっ黒な、ごつごつした巨大な磐じゃん！ なんじゃ、こりゃあ！

こ、こわいよ。

その黒さ、黒曜石つか、なんか、ぬれてるみたい、つかさー、

黒漆塗りみたい？

しかもあざやかな、濃い緑の苔まで生えてるわ。

ニコニコした解説僧がそばに立っていて、だれが来ても同じ言葉をくり返す。

「さあ、さあ、ごらんなさい。

聖櫃は1個の大きな磐を、けずり削りぬいてつくりました。

その磐は聖なる神の山の1つ、イーユイの山頂にあったものです。

それを、聖なる神の森ノールゴイに1年おいてから、ここへはこびました。

深みのある緑の髭のような苔は、霧濃く岩迸るながれや、瀧の多い森において生えたものです。

そのせいで見えにくいですが、よくごらん下さい。

アーキ
聖櫃のぜんたいに、文字があります」

そっか。

てらてらと光って、ぬれているのかとおもったけど、なんだ、文字だあ！ でも、この文字って、なんかヘン。どうやって書いてあんの？

「これは、大磐おおいわの表面を、小さくこまかいたくさんの文字のかたち彫ほって、そのかたちにあうように、1文字ごとに、24金のゴールドと、ダイヤモンドとを、コンビネーションで嵌はめたものです。

こういうふうに嵌はめこんで装飾そうしよくする技法を、象嵌ぞうがんといいます」

あらあらしい石の素材感そざいかんに、ゴールドとダイヤの人工的な文字の、コントラストが眼にあざやか。

聖櫃せいひつを上から見るために、櫃はこをかこむように小さな橋はしみたいなものがつくられていて、ハシゴでそこに上がる。39段くらい。

上がり切あって、橋の手すりに寄りかかって、のぞきこむ。

アーキ
聖櫃の蓋ふたは、ぶあつくて、大きなガラスだった。

「さ、さ。どうぞ、見てください」

解説僧かいせつそうがいった。

ガラスの下に、また、聖櫃アーキが見える。白い石の櫃はこだ。聖なる物語の人物のレリーフが、いっぱい、彫ほられている。

そのレリーフの人物にも、建物にも、背景はいけいにも、ぜんぶに文字が象嵌ぞうがんされている。

「ピュシス山麓さんろくで採れる、最高級の大埋石だいりせきです。

これにも文字が象嵌ぞうがんされています。素材は螺鈿らでん、つまり貝殻かいがらです。貝殻をけずってみがくと、このような寛にじのような、とてもうつくしいかやきが生まれるのです」

その櫃はこにも窓があつて、なかには濃こくぬれたような深みふかのある、クリムゾン・レッドの櫃はこがある。

やっぱ文字が象嵌ぞうがんされてる……（ちよつと、あきれた）

アーキ
「聖櫃は濃紅のうくの金剛石こんごうせき（ダイヤモンド）でつくられました。

象嵌ぞうがんされているのは、ラピスラズリ、クジャク石、トルコ石、少しですが、ゴールドもつかわれています」

まだ、窓がある……。黒い櫃はこが見えた。もう、A3判ばんくらいの大きさだ。

「漆塗りうるしぬです。

文字が金泥きんでいで、筆盛ふでもられています。繊細流麗せんさいりゅうれいな、仮名かなの文字です。その上に、漆うるしがかさね塗りぬされています。

さて、これら4つの聖櫃アーク ぞうがんに象嵌された文字はすべて『kOO』に書かれている文章ぶんしょうと同じです。4つをあわせると、聖なる書物しょもつの内容ないのすべてになります」

そーゆーことかあ。

いや、つてゆーか、ま、まだ、窓があるんですけどお……
絹きぬの裂きれが見えた。

ハデないろづかいだ。

金糸きんしの龍りゅうの刺繡ししゅう、あざやかな蒼さあおの龍りゅうの染め、織りこまれた漆黒しっこくの龍りゅう・深紅しんくの龍りゅう・純白じゅんぱくの龍りゅう……

絹きぬはなにかをくるんでいた。そのくるみは、なかばほどかれていて、和綴わとじの冊子さっしが見える。

解説僧かいせつそうの説明がつづく、

「原書げんしょとは、作者さくしやが設計せつけいし、こまかく指示しじしてつくらせた手書きてがの装丁そうてい本ぽんをいいます。

じつは、一概いちがいに原書げんしょといわれますが、2種類しゅるいあって、装丁そうていがちがいます。皮革ひかくの装丁そうていと、いま、あなたがたが見ている和綴わとじの装丁そうていの、2種類しゅるいです。

和綴わとじのものは、おもに祭祀さいしのためのもので、素材そざいもすべて入念にゅうねんに吟味ぎんみされています。

繊維せんいの長い手すきの和紙わしに、最高の墨汁ぼくじゅうをつかい、老練ろうれんな書家しょかの手で、精妙せいみょうに筆がはこばれ、絹きぬを綯なった紐ひもで、綴じとられているのです。

よくごらん下さい。

ぎやくに、皮革装丁本ひかくそうていぼんは、人の手にふれさせるためにあるといっ
てもよいでしょう。

大聖堂附属の文書館だいせいどうふぞくぶんしょかんに1冊、皮革装丁本ひかくそうていぼんがあります。だれでも手
にして、閲覧えつらんすることが出来ます。ただし、持ち出しは厳禁げんきんですが。

機会きかいがあれば、そちらも見てみるのがよいでしょう」

あたしは、説明のつかない、不安ふあんと動揺どうようとおぼえた。

本は無表情むひようじようにも、自喪じそうしているようにも、憤懣ふんまんが鬱積うつせきしている
ようにも、苦渋くじゅうの表情のようにも、默然もくねんとしているようにも、ただ、
物質ぶつしつでしかないようにも、…見えた。

なんだろうー、この不安ふあん…

なんとなく、視線が第2の聖櫃せいひつの彫りへ、うつった。

大理石の櫃はこの蓋ふたに、浮き彫りにされている聖句せいこ。そのなかで、ひ
ときわ大きなスクリプト体たいで、RW (Real World) と、会社のロ
ゴがあ…

…るはずなんだけど、それがどうしても、そうは見えなくて、
うす暗いせいじゃなくて…

どう見たって…だって、これ、…RWの『W』が…

「ねー、これ、われてなあーい？」

ミーシャが解説僧かいせつそうにきいた。

顔をしかめて、僧がのぞく。

「は？」

そんなはずが」

しかし、言葉は止まった。部屋へやに入ってくる人の出入りでいりも、止ま
った。

「ほんと、これって、はんぶん欠けてなくねー？ WがVみたいだ
わ」

エリコも、無遠慮むえんりよにいう。

イスがうしろからのぞき、

「ほんとうだ、おかしい。以前いぜんに見たときは、…こうではなか
った」

ANKAも、立ち止まったまま、

「どうしたの？　ここは、最もセキュリティの強い、IEの心臓部。
事故が起こるわけないよ」

その言葉のたすけで、蒼白になっていた解説僧も、息を吹き返したように、

「おおっ、そーですとも、おそろくは、たぶん、いや、きつと、かならずや、ぜったいに、たんなる老朽化による、その、自然な、いわゆる、人為的な損壊などではない、経年による、自然な崩壊というか、それ……あれ……これ……」

衛兵が2人、まえにすすみ出た。

「立ち止まるなかれ。さあ、いけ。」

とどまるは無為

ANKAが急に眼をさました人のように、

「そうよ。さ、いこうか」

「うん」

あたしも、いった。エリコが、

「なんかあやしーわね。まあ、いいわ。わたしがそのうち謎を解いてあげるから」

そのうち、わすれるくせに……

部屋を出ると、ふたたび、まっ暗な廊下を手さぐりし、来たときとは、べつの階段を上がって、うす暗い通廊にもどり、あたしたちは、写本を受けとって、大聖堂を出た。まぶしい。

あたしたちは、無口になっていた。路地を歩き、寮にもどる。

「それよりさー、わたし、気になってんだけど」

エリコの言葉に、なぜかムツとしたあたしは、

「なにがよ？」

「あんた、そうおもわないの？　信じらんない」

「だから、なにが？」

「うそー、まじわかんないの？」

「わたしも、わかんない」

ミーシャが口をはさんだ。

「あんたは、なんにも、わかんないでしょー」

イスがしずかにいう、

「^{アー}聖櫃のことだろ」

あ、あれかあー。たしかに……

って感じで、しばらくは、WがVになっていたことが話題^{わだい}で、も
り上がった。けど、写本をしまつて、食堂^{しょくどう}へいくころには、わすれ
られた。食べ物や、飲み物をならべ終えると、

「ねー、クドク・ポイント見てみない？」

エリコがとーとつに、そういった。

イスも、うなずいて、

「そうだね、基本講座^{きほんこうざ}のポイントが加算^{かさん}されているはずだしね」
あたし、びっくりして、

「え、そーなの」

A N K Aが笑う、

「そうよ、あたりまえじゃん。正義^{せいぎ}の叡智^{えいち}をさずかったのよ。とう
ぜん、クドクはアップするわ」

ケータイで見てみた。

AnkaQDQ : 26

EurekaQDQ : 26

EricoQDQ : 23

IearthQDQ : 27

MeasyaQDQ : 25

す、すごい。プラス20ってこと？　ただ、きいてただけなの
に……。

エリコは、数字をにらんで、腕^{うで}ぐみしながら、

「へー。わたし、ビリじゃん！

まー、いいわ。専門講座^{せんもんこうざ}でも、クドク・ポイントつくのよ。

最高の講座^{こうぎ}を受けて、最高の成績^{せいせき}でアカデミアを卒業^{そつぎょう}して、ダン
トツ1位になってやるわよ」

ミーシャも、

「ほんとー、わたしも、専門講座、期待しちゃうー」

そんな感じで、みんなのきょうみは、専門講座へと、うつつていった。

「どれにしようか？」

パンフを見ながら考える5人。

ミーシャが飽きて、

「ねー、ヨセフって、なんか気になるー」

パンフをおいて、エリコがミーシャをにらみ、

「うざい、っーの」

ANKAが笑って、

「わたしは、ヨセフのこと、よく知ってるよ。」

彼は、天才だね。現実の世界でもね。オーストリアの古い貴族に
つらなる血筋で、まあ、いい家のお坊ちゃんってところね」

「オーストラリア？」

って、ミーシャ。

「オーストリア！ 首都はウィーン！

ヨーロッパだよ」

「ウィーン？」

って、あたし。

「オーストリアの首都？」

って、また、ミーシャ。

「そうだよ。どのレベルから、話しはじめたらいいのかな？」

あたし、あたまかきながら、

「なんで、ANKAは、そのヨセフって、知ってるの」

「まあ、ちよつとね」

それ以上、なんにもいいたくないの表情になっちゃった。

「ふーん」

あたし、なんか、おさまらないけど……ま、しかたないか。

「でさー、専門講座、どーする？」

エリコがパンフを手にして、首をかしげる。あたし、眠くなる。暖炉ろって、あったかくって、木の燃える匂においがよくって、パチパチって音がして……なごむな。ふあー。

zzz……ヤバイ、眠っちゃうよー。

食事をすませ、5人で食堂を出る。食事のすんだ人たちで、ワイワイしていた。

「少し散歩しよう」

ANKAがそういった。寮の外に出る。

風はないけど、雪がはげしく降りはじめ、まえが見えなくなるほどになっていた。それでも、ANKAは、やめようとはいわなかった。エリコがなにかいいそうだったけれど、イースが唇に指をあてた。

歩きながら、ずっと考えこんでいたANKAが急にいう、

「ねえ、このさきにカフェテリアがあるよ」

イースがすぐに、

「ああ、それなら、ぼくも知ってる。こっちだよ」

その店は三角形をしたブロックのかどにあった。Y字のまたになっ
ていて、鋭角をなしていた。

「へー、変わってるねー」

っていいながら、エリコ、ちゃっかり、いちばんさきに入る。扉のない、オープンなお店なので、さきに入れば、そのぶん奥に入
れて、あったかいからだ。

店には、あたしたちみたいな学生が多い。

カウンターに立って、あたしたち、よこにならんだ。席に坐ると、ちよつと、値段が高くなるからだ。

カフェテリア、パブ、バルは立って飲み食いが基本。それはいいんだけど、背がとどかないのが、ちよつと問題。

イースなら、ひじをのせられそうだけど、ANKAや、あたしは、あごをのせるのが、せいっぱい。

エリコが暖房のきいた奥の場所を、さっさとじぶん用にキープし

て、

「こっちだよ、はやく来なよ。おせえーな」

「あーん、いま、来てるじゃーん」

ミーシャが素晴らしいながら、エリコのとなりに坐る。

あたしは、ANKAのあとに入って、坐った。

同じカウンターにならぶんだけど、小さいスペースだから、奥からつめていくと、あとから入ったあたしや、イースは、外の寒風にさらされる席になる。

けっこう、寒いけど、これも、クドク、クドク……さいきん、さぼってたから、がんばらなくっちゃ。などと計算する。

これだよ、IEのいいところは。

こーゆー打算的な行為でも、善行として評価されることだ。動機が不純じゃいけないとか、ダルいことや、めんどくさいコト、ぐだぐだいわない。

だいたい、意識しなきゃ、なんにも、できないわけでしょ？ 少しくらい下心があつたって、とうぜんじゃん。ナイなんて、どうやるの？

純粹な善行、ってムリすぎるよ。机上の空論。意図して行動、それが事実でしょ？

それにしても、イースは、ANKAとともに、先頭を歩いてたのに、みんなにゆずって、カウンターの、いちばん、はじっこにいる。からだがはんぶん外に、はみ出す場所だ。んゝゝ。エライっ！ まあー、イースのばあい、剣に手をそえながら、いちばん、外がわの席にいと、クドクっつか、どっちかつつと、護衛っぽい感じだけ……

あつたかい飲みものすすりながら、みんな、しばし沈黙。

エリコがとうとつに、

「でさー」。

あんたたち、専門講座、決めたの？ わたしわねー」

もったいぶって、少し間をおき、あたしたちの顔を見まわしてか

ら、「商学講座にしたわ、どお？」

あたし、おもわず、

「あんた、まさか、ここで、カネもうけ考えてンじゃないでしょーね？」

「わるい？」

きよく、ただしく、モウければ、クドクになるわ、ユリイカ。
で、ミーシャ、あんた、なんにしたの？」

「えー」

「なによ、じつは、もう、決まッてンでしょ？」

「うん。装飾神学講座」

「なに、それ？」

4人が同時に、そういった。

ミーシャが、

「教会や、カテドラルの装飾、絵とか、彫刻とか、インテリアとか、建築デザインとか、庭園デザインとかするの。」

お城や、お濠や、橋も、デザインするのよ。

すごーいの」

エリコが眉を上げて、

「なんで、あんたが」

「なんか、パンフがきれいだったしー、笑わないでよ。ANKAは、なんにしたのよー」

ANKAが笑いながら、

「わたし、じつは、ここに来るまえから、決めてたんだ。
兵学よ。」

この世で、いちばんシリアスで、実践的な学問だわ」
な、なるほど。

あたしがいわないのを見て、イースが、

「ぼくは、聖人伝詩学講座。」

今日、眼がさめたら、決心がついていた」

あたし、イミフで、ぽかーん。ANKAですら、けげんそうに眉を

しかめた。

「なに、それ？」

「聖人の伝記を多くの吟遊詩人が歌いつたえている。

いままで、詩人たちが伝承した詩を学ぶとともに、聖人の生涯をも学ぶのさ。

聖人の生涯を、日ごろから唱えていれば、魂が浄化される。

……ような気がしてね。

思考で到達できないものにたつするには、こういうやりかたがよいとおもったんだ」

エリコがよこ眼であたしを見る。

「ユリイカ、あんた、まさか決まってるんじゃないでしょうね？」

「ふん」

寮に帰って、夜、あたしは、独り消灯時間になっても、ベッドにいかず、暖炉のそばにいた。パンフを見ながら。

あたしのキャラは叡智。だったら、やつぱり、これなのかな。でも、なんかヘンな感じがするんだよねー。

わるい予感っーか（笑）。

『真実への叡智を学ぶ講座』

講師　タカフシ・ヒラエ。

マコトヤ・アマヤスの友人。叡智の最高権威者の1人。

募集定員　1名。

コメント　至高の叡智をきわめたい人に、ぜひおすすめ♡

だから、そのハート・マーク、なんなんだっつーの！　っーか、こんなに、うたい文句がすごいのに、いまだに定員（1名）にたっていない、って、どーゆーこと？

あたしが心配すんの、ムリない、ふっーだよね？

くやしいけど、エリコの攻略本、見せてもらおうかしら。んー、こまった。

でも、今日は、眠いし、エリコ、寝てるし……

8 ありがとう、タカフシ師……

『真実への叡智を学ぶ講座』の教室は大聖堂のちかくにある、古くて、小さなアパートの1室だった。

建物は石づくり。石のかたちがそろっていない。風雪になぶられた壁には、冬枯れの蔦がびっしり。蔦は雪をかぶっていた。

3階まで、せまい、暗い階段を上る。カビ臭いわー。

廊下があった。

部屋の扉がならんでは。

あたしは、『真実への叡智を学ぶ!?!』(…っか、「!?!」って、どーゆーことなんだよ)と書かれた扉をノックした。

「どーぞお」

なんっー気のぬけた返事。あたし、これ、まちだいじようぶ?

扉をあけると、部屋は正方形だった。机が1つと、椅子が2つあったけど、タンスも、本棚もない。本ぐらないのかよ。

四角いストーブの上で、ケトルが湯気を吐いている。

シューシュー。

その音しかない。

しずかだ……

タカフシ師は、奥の椅子に坐っていて、手まえの椅子に坐るよう、あたしにすすめた。

「ユリイカさんだね」

「はい」

あたしは、あつけにとられてた。

タカフシ師は、20代半ばくらい? 不精髯で、毛糸編みの帽子、

モコモコにふくらんだダウンジャケットを着て、ヒザがやぶけたデ

ニムのパンツに、ハイカットのバスケット・シューズ、ってゆーいでたちだった。

まぶたが大きな二重で、はんびらき、ぼんやり、とろん、って感じの三白眼。さんぱくがん

かるくめまいを感じたけど、あたし、気をとりなおして、ともかく、坐すわった。

これじゃあ、生徒せいと、来るわきやねーわ。

「じゃーねー、さっそく、授業じゅぎょうに入はいります。いいかな？」

「え？ あ、はい」

「えー、つと。まず、諸行しよぎょうとはー、無常むじょうです」

「せんせー、いきなり、ちつとも、わかりませんけど」

「そー、だよね。では、では」

まちで、きもいんですけど？ きもー、キメー、キンモーっ!!

「んー、なんていったら、いいのかなあ」

ほ、ほんとに教おしえられるのか？ いままで、どんなふうにしたんだよっ。

「まあ、あれだよね。

わかるよね」

「へ？

なんなの？」

「というか……そのう。

わかんない、って、なんですか？」

「わかりません（きっぱり）」

「では、わかる、って、なにかな」

「だから、わかりません」

「で、そのわかんない、って、なんですか」

「知りません」

「そーそー。意外いがいに、才能さいのうあるね。大々大々大正解だいだいだいせいがい」

「は？ まち、なんなの？」

「ってか、なんで、意外いがいなんですか？」

「いーから、気にしない。

ブラボー」

：…どこの国くにの人だよ。

「あなたは、天才てんさいかもしれない。

じゃー、諸行無常しよぎやうむじやうは、わかりましたね」

「え？ ぜんぜん、わかってないんですけど」

「いや、じゅうぶんです。

むしろ、それ以上、考えてはいけません」

といって、へらへら笑う。

「ではね、ユリイカさん、この机つくえの上に、お茶わんちや、おきます」
ポケットから大きな茶わんちやを出した。

てか、よくそんなもん、入ってたナあー……………

「これは、志野焼しのやきの、お茶わんちや、です。

今日きょうから、これを毎日まいにち見て、無常むじやうの練習れんしゆうをしましょう」

「だから、無常むじやうってー、なんですか？」

「いや、だいじょうぶです」

「はあ？ それじゃ、なんも、わかんないよー」

「そういうことです」

「はあー？」

「そう、すばらしい。

というか、わかるというのは、なににも、わかっていないんだから、
知らなくても、同じなんです。

さとした人も、おろかな人も、みんな、だれでも、レベルは同じ」

「そ、それがムジヨー、ってことなの？ じゃあ、勉強しなくても、
いーンじゃん」

「そーそー、意味ないんです。

意味なんて、イミナインです」

「なんか、そーゆーことなら、まえから、知っていたよーな……気
もしなくもないケド……」

「そうですか。

やはり、天才だったんですね。

ちなみに、これは、白志野焼しろしのやき、といいます。

岐阜県ぎふけんの南東部なんとうぶ、すなわち美濃みのの東部とうぶ、東濃地域とうのうちいきのもので、いわゆる『美濃陶みのとう』の類たぐい。

淡黄白色たんおうはくしよくの素地きじに、長石釉ちようせきゆうで白濁はくだくした、深みある、しつとりした光沢こうたくがあります。

長石单味ちようせきたんみの乳濁にゅうだくした釉薬ゆうやくを、たっぷりかけて焼成しょうせいすると、釉くすりが半透明はんとうめいの白斑しろむらをなして、こんなふうになるんです。

ポツポツこまかい穴あながあるのは、陶土とうどにふくまれていた空気がぬけた痕あとです。小孔しょうこうといえます。

表面くすりに見える釉かんにゆうのヒビは貫入かんにゆうです。

いずれも、焼いている段階だんかいでできちゃうものですが、これが味あじわいなんです」

「あのー、ちょーつまんないンですけど？」

「そーら、ふくまれた鉄分てつぶんが赤い斑文はんもんになって、表面あらわに幽玄あやうれるのが、火ひいろ（または緋ひいろ）です」

「……で？」

これで、どうしろと？」

「じゃ、がんばって」

「えー？」

「私は、ちよつと、出かけます」

ンナ、バカな？ あたし、なにしたらいいのか、ぜんぜん、わかんないし、ここに独りひとでのこつて、茶ちやわん、見てろつてーの？ はあ？ もう帰る！

そんなとき、エリコからのメールが、

『あんたの講座こうざ、けっこー難関なんかんらしいねー。

高望たかのぞみやめて、現実げんじつ、見みなよ（笑）』

ちよーーーーームカつくうーーーーっ！ うぎやああああー
ーっ！

ふん。なによ。かんたんじゃん。先生さいのうは、才能さいのうあるっていつてく

れたもん。やってやるわ。

なに、やるんだか、わかんないんだケド。

けつきよく、その日は午前中、じいーつと白志野を見てた。

はあゝあゝアホらし。

午後、サブ専門講座に行く。

冷たい手を吐息で、あたためながら。

もう1つの専門講座『文学における司法史講座』。って、なんの
ことか、わかんないんだけど、ANKAと同じにした、ってだけ。

「で、どう、ユリイカ、初日は」

さっそく、その日、となりに坐ったANKAにきかれた。茶わん
を：：って、なんて、こたえたら、いいのよー？

「ぜんぜん、わかんないよ。てか、それ以前なのー。」

あたしも、ANKAと同じにすれば、よかった」

「へー。そうなんだ。」

わたしは、今日、ハンニバル・バルカ (Hannibal Barca、紀元前247
年ー紀元前183年。カルタゴの将軍) と、ローマ軍の戦闘 (ティキ
ヌスの戦い、トレビアの戦い、トラシメヌス湖畔の戦い、カンナエ
の戦い) について学んだわ」

おわあ！ わかんねー。あたしにや、どっちでも同じかあ：：ち
つとも、わからんわ。

夕方、寮にもどって、大食堂で食事後、部屋で暖炉のまえに、み
んな、集まる。

気のせいか、だれもが調子よさそー。それぞれの専門講座のこと
で、話がもり上がる。あたしのメンタル、ついていけない。

なんでよ、あたしだけなのお？

つぎの日、雪が降って、窓ガラスくもって、タカフシ師は、

「どうです？」

どおっ、て、なんもないよ。っーか、それ以前。どーも、こーも、
ないよ。

「じっと、見ていると、ムジョーがわかってきます」

まち？

じつと、見る。ほんとか？

んー、なんか、わかるのかな？

わからん。

つぎの日も、つぎのつぎの日も、雪をふんで、アパートまで来て、階段を上がり、坐^{すわ}って、茶^{ちや}わんをにらむ。

んー……………んん……………めそめそ

「どうですか？」

「たぶんさー」

「たぶん？」

「100年ぐらいかかるとおもうよ」

「ほう。そんなに、はやいですか」

「あたま、だいじょーぶ？ だからさー、やりかた、よく考えたほうがいいんじゃないか、と」

「ほお。たとえば？」

「そーね」

って、いったものの、なんも、おもいつかなかった。

寮^{りょう}に帰ってからも、食事^{しょくじ}のあとの暖炉^{だんろ}のま中でも、会^{かい}話^わに参^{さん}加^かせず、あたしって、ムツツリ考え^{かんが}えつづけていた。

ゆれる炎^{ほのお}を見^みつづける。ふしぎなきぶんになってくる。

なんだか、すべてが光^{ひかり}と影^{かげ}、幻^{まぼろし}のようにおもえる。瞑^{めい}想^{そう}的^{てき}な、現^{げん}実^{じつ}逃^に避^ひ的^{てき}なきぶん^おに堕^おちていく……………

ああ、もうこんな時間^{じかん}なんだ、っておもって、今^こ宵^よもまた、眠^ねる……………

そして、翌^{よく}日^{じつ}、また、肩^{かた}をおとして、帰^{かえ}って来る。

深い黄^{たそ}昏^{がれ}のなかを……………あーあ。

そんな日々、なんか、老^ふけた気がする。髪^{かみ}白^{しろ}くなってるないか？ シ

ワできてないか？ 鏡^{かがみ}見る。同^{どう}じか。変^{かは}わってナイ……………

同^{どう}様に、そのつぎの日も、くり返^{かえ}しだ。茶^{ちや}わんをにらむ。

そして、いつもと同じく、寮^{りょう}に帰^{かえ}って、ムツツリ。

ANKAが気にしはじめた。

「どーしたの？」

あたし、事情を話した。

「それって、さすがに難問なんもんね。想像そうぞうもつかないわ」

イスも、うなずいた。

「おそらく、IEのなかでも、最高級さいこうきゅうの超難問ちょうなんもんだろ。

なにしろ、講師こうしが、あのタカフシ師しだし」

あたし、やっぱ、高望たかのぞみすぎたってこと？　そういうつもりじ

やなかったんだけどなー。ただ、なんにも、知らなくて……グスン。

涙なみだまぢで出てきた。

もしかして、受講希望じゅこうきぼうがなかったのって、レベル高すぎて、みん

な、敬遠けいえんしたってことかもって、いまごろ、気がつく。

失敗しっぱいしたより。

エリコが、

「ばかね。なんで、わたしに相談そうだんしなかったのよ。

まあ、こうなったら、基本きほんにもどってやるしかないわね」

「基本きほんって、なによ」

「そんなの、じぶんで考えなよ」

「なに、それ。よりするに、エリコだって、わかんないんじゃないん」

ミーシャがいう、

「わたし、こまったときは、『k O O』、見てるよ。イクシユヴ

アーン学長がいつてたもーん」

写本しゃほんか。じつと見るが。

なんも出て来こん。ため息いき。今日けふも、憂鬱ゆううつなまま、寝ねる。

そのつぎの日も、正方形せいほうけいのアパートの部屋へやで、あたし、茶わんを

ながめてる。グスン。

だめ。

時間がすぎていくだけ。

毎朝まいあさ、鏡かがみ見ても、暗くらい、鬱うつのあたしがいるだけ。顔いろ、青い。

髪かみぬけてねー？　加齢臭かれいしゅうねーか？　んなコト、ナイ……

はあ……

で、2週間が終わって、卒業の日。

みんな、いまごろ、卒業許可、もらってるんだろーな……。あたし、落第して、2週間、そう、少なくとも2週間、ここに独りのこされるんだ……。ANKAも、みんないつちやうのに。エリコ、笑うだろーな。あーあ……

そーおもって、椅子に坐ったまま、がつくりうなだれて、先生が口をひらくのを待っていた。

9 サヨナラ…… アカデミア

「卒業おめでとう」

「え？」

「許可書、ここにありません。たいへん、がんばりました。」

やはり、天才でしたね」

「え？ えー？ 先生つ、あたし、意味、わかんないんですけど、ぜんぜん！

あたし、これっぽっちも、わかってないし、できないし、なんにも、おぼえられなかったし。

なんで、卒業できるんですか？」

「だから、卒業です。」

あなたは、卓越した天才です。

私の講座など、ひつようがなかったんです。

いろいろなことが卒業してから、わかってくるでしょう。許可書の言葉をよく読んで、よく考えましょう。

私は、あなたに、龍の称号をさずけます。

では、さようなら」

あたしは、ぼうぜんとしたまま、先生が手書きした羊皮紙の卒業許可書を受けとった。おじぎもできなかったし、お世話になりました。ありがとうも、いえなかった。

あたしは、魂のぬけたまま、階段を降り、路地を歩いた。そのあ

と、もう1つの専門講座の卒業許可書を、どんなふうにもらったか、
ぜんぜん、おぼえていない。

寮に帰るとちゅう、裏路地のどっかの建物の階段に坐って、リボ
ンほどいて、卒業許可書をひろげた。お尻の冷たさなんて、気がつ
かなかった。

『貴殿が『真実への叡智を学ぶ講座』の学を究め、
修得したことを、ここに証する。』

この言葉を胸に、これから、よく励め。

清明在躬気志如神（心身が清明であれば、大いなる働きを
なすことができる）

付記 併せて『青き龍』の称号を授与する 』

青龍の称号ってなんだろう。

そのほかに書いてあることも、よくわかんない。わかんないから、
あたし、ただ、感激しかなかった。

涙が出てきて、止まらない。ああ、センサー、ほんとに、ありが
とう。まち、意味わかんねーけど。

事務局に寄った。

卒業許可が出たら、事務局に寄れ、という指示だったからだ。

いくと、事務の女性が許可書に、証明の印璽を捺してくれた。

「さ、これでアカデミア公式の証明がついたわ。

許可書はね、この証明印璽があつて、はじめて証書として世間に
通用するのよ。

アカデミアを出るまえに、大聖堂のアユ礼拝堂にある天啓の壇に
いって。そこで、I Y Eの聖なる徴に、この証書をかさねるのよ。

それによって荘厳され、卒業があなたたちに授与され、クドクの
レベルが上がるわ」

へー、知らなかった。

ンなこと、いつてたつけ？

寮りように帰ると、もう、みんながいた。

「なんだよ、やつぱ、落第らくだい？　きやはは。

泣なくなよ、ユリイカ」

すげームカつく、エリコの声。

「かつてなこと、いわないでよ、見て、ちゃんとして、卒業そつぎようしたわ。

あんた、読よめないんだつけ？」

ミーシャが入ってきて、

「えー、すつごーい、やったねー、ユリイカ！

おめでとー」

「やめときな、ミーシャ。ぐーぜんだよ、あんましほめると、ちょ

ーし乗るから、ユリイカって」

オメーじやねー、つーの。

ANKAも、来た。

「ほら、いったとおりにじゃん。だいじようぶだつて。

まじ、すごいとおもうよ。自信じしんを持たなきや、ユリイカ」

イースも、しずかにいう、

「ほんとに、そうだ。タカフシ師しの講座こうざを卒業そつぎようしたんだよ。

超難関ちようなんかんのエリート・コースだ。

マスター級きゆうの榮譽えいよだよ。就職しゅうしよくも、ひく手あまたじゃないかな」

就職しゅうしよく？

あたし、ぜんぜん、考えてなかった。つーか、わすれてたあ。あ

たしたちつて、就職しゅうしよくすんだよー。

「わすれてたみたいだね」

エリコがすかさず突つつこんできた。

「職しよくなしで、どうやって生きていくつもりだったんだよ？　あんた、

あたま、だいじようぶ？」

イースが笑わらい、

「まあ、いいじゃないか。

勤めさきには、こまらないよ。この理想世界りそうせかいでは、真理しんりを探究たんきゅうす

る哲学が最高の実用的学問なんだから。

オファーが事務局に来てるかもしれない」

かなあ……えへへへ

けど。……そうでもなかった。

ケータイで、事務局学生部就職課に連絡したけど、『真実への叡智を学ぶ』の卒業生への求人は、まったくないとのことだった。

けっきょく、そのあとも、数日間、待ったけれども、どこからも、オファーなんか、なかった。

求人が多い講座の卒業生以外は、はやくから就職活動しとかなないと、就職浪人になってしまいうらしい。

先生が就職活動を指導してくれるばあい（タカフシ先生って……、やりそうにないよな）とかも、あるらしく、そのへんは、先生によって、かなりちがうらしい。

エリコなんかも、じつはないしよで、就職や、面接の申し込みを、はやくからしていたらしいけど、けっきょく、どこもだめだった、ってことも、わかった。ホっ……

数日、あたしたち、いっしょうけんめい、就職活動した。

「ミーシャ、どうだった？」

「えー、ぜんぜん、だめー。」

今日も、いまから面接いくー」

へいぜんとしてるけど、イースは？

「ぼく？」

いや、ぼくは、ゆっくりさがすよ。

ANKAと、とりあえず、いっしょにいつて、なんかの役に立ちたい。

そうやってくうちに、ぼちぼち、やりたいことがわかるだろうとおもうし」

そう、就職さががあったのは、ANKAだけだった。

もともとは、彼女も、ゆっくりするつもりだったらしい。

けど、兵学講座の卒業生は、人気がある。

毎回、多数の卒業者がいるにもかかわらず、ひく手あまたで、むしろ、足りないくらいらしい。

やっぱ、ユーザーのほとんどがゲーム的なたのしみがしたくって、IEに参加してくるから、兵学にかぎらず、バトルとか、戦争とかにつかえる人には、いつでも、たくさんニーズがあるらしい。

しかも、ANKAは、トップ・クラスでの卒業だったから。

就職さは、レオン・ドラゴ王国。

国王付属の戦争担当補佐官で、陸軍参謀つー肩書らしい。スゲ

い。就職が決まったその日から、ANKAは、独りで考え、いろいろな計画に没頭し、ずっと、いそがしそうにしていた。

図書館に出かけて、なにかをしらべているときもあれば、ずっとケータイをにらんで検索し、ブックマークしたり、ダウンロードしたりしていた。あちこちに電話したり、手紙を書いたりしていると

きもあつた。登録したり、申請して許可をとったり、パスワードを新たに取得したりしている。

絵や、図面を書いて、ケータイ・カメラで撮って、画像データにしておくったり、いきさきも告げずに出かけて、なん時間も帰って来なかったりしたときもあつた。

図書館で借りた地図をひろげて、ずっと、考えているときもあつたし、ネットで地理や、気候をしらべていたこともあつた。

あたしは、がまんしてたけど、やっぱ、いう、
「ねえ、ANKA、あたしも、ついていっていいかな。

てか、あんたと離れる考えなんて、まるでなかったから、就職してバラバラになれて、急にいわれても、こまっちゃうよ。

それに就職自体、ぜんぜん、決まもないし、あんたの付き人で雇ってよー」

「いいわよ。

身のまわりの世話する人や、ブレインになる人や、SP（要人警護

専従警察官せんじゆうけいさつかん(Security Police)を、公費こうひで雇やとっていいことになっているから、そういうことにして、いっしょにいこうよ」

ANKAは、支度金したくきんとして、すでに、大金たいきんをもらっていた。

「じゃ、あたし、秘書ひしょで、イースが護衛ごえいね」

「ふふ」

そうと決まれば旅立ちたびだのしたくを急いそがなくちや。

ANKAは、個人レベこじんルの旅きゆうじたくを、急きゆうきよ、キャラバンのしたくに変更へんこうした。

翌日よくじつ、いそがしそうにしているあたしたちをよこ眼めでにらんでいたエリコがいった。

「あんたらさー、いったい、じぶんたちだけで、やっていけるつもりなの？」

イースは、ともかく、ユリイカなんて、なんの役やくに立つのよ。

あたまがよくて、決断力けつだんりよくや、行動力こうどうりよくがある人間がひつよーじゃないかしら？」

ANKAが笑った。

「そういうやつがいれば、ひつようね」

「あーら、ずいぶんじゃん。

ANKA、あんたは、たしかに、優秀ゆうしゅうだけど、あんたにないものを、わたしは、たくさん、持ってるわ」

いらぬものばかり、いっぱいな……

イースがふりむいた。

「エリコ、いっしょにいきたいのなら、すなおに、いったほうがいいよ」

「んまーっ、じょーだんじゃないわっ。

なんで、わたしがそんなこと、いわなきやいけないわけ？」

「あ、そう？」

なら、好きにしなよ。ミーシャといっしょに、どっかに旅立たびだつの？」

あたし、いってやった。

「んまー」

そういつて、しばらく、ふくれっ面つらのまま、だまっていたエリコが、

「ふうーっ。

そー、ミーシャね。

ま、わたしがあいつのめんどろ見てやんなきゃなんないんだけど、ミーシャがねー、どーしても、あんたらについていきたがってるのよねー。

まー、しかたないかー。

彼女のためだもん。

わかったわ。あたしも、あんたらに、ついてってやるわよ」

ついに、そういった。

あたし、イース、ANKAは、おもわず、プツ。

エリコは、話が決まると、あわただしく旅たびのしたくをはじめた。しばらく、どたばたしているな、とおもったら、ケータイを片手かたてに、みんなにむかって、いう、

「ねー、あんたたちさー、アバターを、もう1つぐらい、つくっておこうとか、おもわないの？」

服をつめていたミーシャが顔を上げあて、きく、

「えー？

どーゆーことお？」

あたしも、手を止め、

「そんなこと、できるの？」

イースが深くうなずき、

「なるほど。

たしかに、アバターの数に制限せいげんはない」

しかし、ANKAが異議いぎを唱となえて、

「入力画面にゆりよくがめんにもどれば、つくることができるんだろうけど、新しいアバターがここに到着とうちやくするのを、待たなくちゃいけないんじゃないの？」

それとも、このステージまで、ひっぱれるの？ わかるとおもう

けど、わたしたち、とてもじゃないけど、待ってなんかいられないのよ」

エリコがわざとらしく、眼^めをまるくした。

「えー、ANKAまで、そんなこというの？　わたしをバカにしてない？

そのぐらい、考えてるわよ。

見て、このフリー・ソフト。『アデション・オブ・キャラクター
(Addition of character)』ってのよ」

ANKA、笑う、

「キャラの追加^{アデション}？　そのまんまのネーミングだねー」

「なんだっていいじゃん。

キャラ追加^{ついか}のアプリよ。

これをつかって、独り^{ひと}でバンドとか、サッカー・チームとかを、つくって、うごかしているユーザーがいるのよ。

知らないのー？」

「へー、じゃ、ダウンロードしよ。URLは？」

みんな、旅^{たび}じたくをやめて、それぞれ、アバター^{せいさく}製作^{はい}に入った。

「わかってる、ミーシャ？　自由^{じゆう}意志^{いし}設定^{しやうてい}にしとくのよ。

あんた1人で、2人ぶんも、操作^{そうさ}できないでしょう」

「わーったあ。

でもね、わたし、いま、なまえ、どーしよか、まよってるのー」

イスがあたまを上げた。

「おっと。

みんなー、今日は3時になったら授与^{じゅよ}にいくって、予定^{よてい}じやなかったか。もう、2時半だ」

「いけない、エリコがおもしろいもん見つけるから、わすれちゃってたわ。

さあ、出かけよう」

ANKAの言葉で、あたしたち、出発した。

巨大な大聖堂^{きよだい}は到着^{だいいどう}してから、内部で歩かせる。やっと、見つ

けたアユ礼拝堂れいはいどうに入ると、四角い背せの高い祭壇さいだんがあつて、下のほうに、I Y Eの徴しるしがあつた。

「はやく、だれか、やんなさいよ」

「では、ぼくがやろう」

聖なる徴しるしに、卒業証書をあてて、かさねる。

徴が光線を発射し、卒業証書を七色なないろに透すかした。

すると、それに感応したように、イースのからだから、光の文字が泛うかび上あがり、しみこむように消えた。

消えたと、おもったら……

こんどは、大きな光ひかりになって、イースのからだの内うちがわから、いちどだけ強くかがやき、余韻よゐんをのこしながら、じよじよに消きえていった。

それは、高貴な黄金こうきの霧きりのようだった。

QDQ : 38

「すっごーい」

ミーシャが息いきを飲んだ。

「じゃ、いくわよ」

こんどは、ANKAがすすみ出た。

ぴかーっ。

QDQ : 39

うわ！ やっぱり！

みんな、つぎつぎと、順番じゅんばんにやっていく。

EricoQDQ : 35 MeasyaQDQ : 34

あたしも、かさねた。

光ひかりがあらわれると、からだがかかるく、すっきり気持ちよくなる。なにかが、すうつとしみこんでいく。あたまがひんやりして、爽快そうかい。

あたし、眼には見えないけど、青い龍りゅうの紋もんが青白くかがやいてからだに入り、臍下丹田せいかたんでんに降おりるのを感じた。あたしのこころの眼めがそれをしずかに見つめていて、龍りゅうが巢すにもどったように、丹田たんでんにおちつくのを感じる。

ふと眼を上げた。

世界がひろがって感じられる。

ああ、自由だ、って腕を蒼穹に、おもいつきり伸ばしたいきぶん。

なにげに QDQ を見る……

え？

なに、これ？

うそ？ うそでしょ？

だって！

1036 !? ーっつつつつつ !!

うえーーーーーーーーーっ！ QDQ : 1,036 !!!!!

うわあっ、ぷ、プラス 1000 かよっ……スゴスギルわ。

「す、すごいね」

さすがの ANKA も、声がうわずっていた。

エリコも、ひきつっている。なにも、いえないらしい。（あたし

も、同じくだけど……）

イースは、感嘆し、

「さすが、タカフシ師の講座を受けただけのことはある。それにし

ても、予想以上だ」

「すごい、すごい」

なぜか、ミーシャは、テンションあがっておおさわぎ？ なんな

んだ……

そんな感じで、泛かれながらも、夢みたいに、ぼんやりしながら、
寮までもどった。

しばらく、大さわぎで、足が地に着いていない感じだったが、や
がて、現実にもどって、ふたたび、アバターづくりに専念しはじめ
た。

これって、こり出すと、さいげんない。まだまだ、手を入れたい
きぶんが止まらなくなる。

あたしだけじゃなくて、みんなが同じような気持ちらしく、今日、
ムリに完成させないで、旅立ちの日までに、つくり上げよう、その

日になったらおたがいに見せあおう、ってことにした。

明日は、もう、出発しゅつぱつという日。ミーシャがとーとつに、いった。

「附属文書館ふぞくぶんしょかんは、どーするの？」

「いこうよおー」

おお、それがあつたか。

「そうだよ。わすれていた。いってみようか」

イスがそうこたえた。

エリコがほほをふくらませ、

「じょうだんじゃないわ、こんなに寒いさむいのに！」

それに、もう午後3時ごごよ、じきに、しまっっちゃうわよ。『kOO』イジってる時間なんか、とれっこないわ！」

それでも、ミーシャは、

「でもさー、エリコ、手にとって、さわれるんだよー。ちよつと、

見てみよーよ」

「来こたくなきや、来こなきやいーじゃん。あんただけ寮りょうにいれば、いい話じゃん」

あたし、いってやった。

「みんな、いくの？」

エリコが見まわすと、一同いちどう、うなづく。

「わたし、1人をのこして？　じょーだんじゃないわ。いってやるわよ。しかたないわね。クドクのために、つきそってやるよ」

そのいいかたー、ムカツクーっ！

イスがいう、

「そうそう、クドクといえば、『kOO』の原書げんしょにふれれば、それだけで、クドクのポイントがアップするらしい、ってきいたことがあるな」

エリコが眼みひらを睜みひらく。

「さ、いくわよ、あんたたちって、どうして、いつも、そんなにト

ロいの？

さっさと、したくしなさいよ、ミーシャっ」

あたしたちは、階下かいかに降りて、文書館ぶんしょかんへの道を舎監しゃかんから教わった。ラクシヤは、さげすみの眼で、あたしたちを見おろす。

「なんだ、おまえたち、いまごろ、いくのか。

ほかの者ものは、みんな、とつくに、いつておる。

大聖堂だいせいどうの附属施設ふぞくしせつだ。ウパニシャッド大聖堂だいせいどうのちかくにあるに決きまってる。

この地図ちずを見ろ。ほら、ここだ」

「なんだ、大聖堂だいせいどうのすぐちかくじゃん。あんたたち、気がつかないの？」

エリコが唇くちびるをとがらせる。おまえもだろっ！

見えなかったのは、しかたがない。どこもかしこも、高たかい建物ばかりで見えないんだから。

いってみると、大理石で純白じゆんぱくの建物だった。

ごてごてした、ネオ・バロックふうの建築様式けんちくようしきだったけど、雪との区別くべつができないくらいに白い。

I Y Eのマークが尖塔せんとうに高たからかにかがげられている。ファサードの黄金おうごんの上に、赤と青と緑とで、聖人せいじんをえがいたアイコンがかがやいていた。

門衛もんえいが2人、立っている。黒い鎧よろいで身を装甲そうこうし、濃こい赤のたてがみが兜かぶとに飾かざられていた。

A N K Aが、

「入れますか」

衛兵えいへいがいう、

「だれであろうとも、こばまない」

はあ？ こばまないなら、なんで、衛兵えいへいが立ってのよ。ま、いいか。

エントランスの中央ちゆうおうに、巨大な天球儀てんきゆうぎがあった。

その奥おくに、カウンターがあり、黄金おうごんの甲冑かちゅうを着きた女の司書ししよが3人

坐^{すわ}っている。兜^{かぶと}に鳳凰^{ほうおう}の金細工^{きんざいく}が飾^{かざ}られていた……

「『kOO』が覧^みたいんですけど」

ANKAがきく。

「どうぞ。案内^{あんない}します」

蔵書室兼閲覧室^{ぞうしょしよけんえつらんしつ}に入った。

日が大きくかたむく時刻^{じこく}で、黄昏^{たそがれ}の光^{ひかり}がななめに濃いオレンジいろでさし、物の陰翳^{もののいんえい}がバイオリンの低音部^{ていおんぶ}の弦^{げん}をゆっくり弓^{ゆみ}でひいたときのような、深い闇^{やみ}をなしている。

不安^{ふあん}にさせるコントラストだった。

本棚^{ほんだな}が列^{れつ}をなして、たくさん、ならんでいて、迷路^{めいろ}みたいだ。ひろい。穹窿^{きゆうりゆう}型の天井^{てんじやう}も高い。人影^{ひとかげ}がまったくない。

いや、1人閲覧机^{えつらんくきえ}で、頬杖^{ほおづえ}ついて、羊皮紙装订^{ようひしそうてい}の書籍^{しよせき}に深く耽^{ふけ}っている男^{おとこ}の人がいた。

小さなふちなしメガネをかけて、とがった鼻^{はな}が猛禽類^{もうきんるい}っぽい感じで、ノーブル。髪^{かみ}がまっすぐ、肩^{かた}の上あたりで切りそろえられている。

「普蕭^{ふしょう}さま、明日^{あす}は、ご出^{しゅつ}発^{ぱつ}ですか？」

あたしたちを案内^{あんない}する司書^{ししょ}が歩きながら、声をかける。

男^{へんじ}は、返事^{へんじ}もしない。

「あのかたは、天平普蕭^{あまひらふしょう}さま、といって、大司教^{だいしきやう}イタルさまのバンドで、ドラムをたたいていたおかたです。

IEの最も古いユーザ^{そうそうき}の1人で、RWの草創期^{そうそうき}から、ずっといらしゃる、とても有名なかたです。4神^{しじん}のうちの、1人です」

エリコがいった、

「へー、わたし、そんなの、きいたことないわ。

でも、いくらエライからって、あんななまいきな態度^{たいど}はないんじゃない？」

おまえもな……

つかつかと、普蕭^{ふしょう}のまえにいつて、いう、

「あんた、稲穂^{いなほ}は実^みるほど頭^{こうべ}を垂^たれる、って言葉^{ことば}、知^しってる？」

えらくなつた人間ほど、腰がひくいもんなのよ」

それでも、普簫は、顔を上げず、つぶやくように、

「なにもかも、脳神経細胞を走る電氣的現象でしかない。

ふ：：：」

そういつて、不敵な微笑を泛かべる。

ぽかーんとするエリコ。

ふんぷんして、もどつて来た。

「やってらんないわ！ 相手にすンのもバカらしー」
しずかだ。

ほかに、人がいるのかもしれないけど、たとえ、いたとしても、
本棚で見えない。
ほんだな

高さが3階建ての建物ぐらいあるから。

「これです」

司書がとつぜん、足を止め、手のとどくところにある冊子を、ひ
よいつと、つかみ出す。

え、それなの？ なんか威厳も、重厚さも、もったいぶりも、な
さすぎて、そんなもんなの？

「えー、すごーい」

そういつて、ミーシャが飛びつく。

「ちよつと、ミーシャ、どきなさいよ、見えないじゃないの」

エリコ、おまえはー。

「どうぞ、手にとつて、ごらんになってください」

それは、ありふれた茶いろのなめし皮で装丁された冊子だった。
革のベルトがついている。

ひらくと、和紙に筆で書かれていた。

なんじゃ、こりや：：：

「ふーん」

みんな、反応はびみようだ。なにがありがたいんだか、わからな
い。

「では、ゆっくりごらんになってください」

そういうのこして、司書^{ししょ}は、カウンターのほうへ、もどっていった。

ゆっくりもなにも…聖なる書物がエリコの手に持たれていたのは1分ですらなかった。ミーシャの手にわたっても、その20秒後にはANKAの手に、40秒後にはイース、55秒後に受けとったあたしは、もとの位置^{いち}に、そつともどした。

Anka QDQ : 49

Eureka QDQ : 1046

Erico QDQ : 45

Iearth QDQ : 48

Measya QDQ : 44

かんたんに、10ポイント・アップ？

これでいいのかと、おもいながらも、ここでは正しい叡智^{えいち}こそが最重要事項^{じゅうようじこう}のだと、強く再確認^{さいかくにん}した。

翌日、朝4時。

寮^{りょう}の部屋^{へや}をかたづけて、来た日と同じにする。

なつかしく見えた。

もとの位置^{いち}に、もどされたベッドや、火のないさみしげな暖炉^{だんろ}や、小さな窓^{まど}を見て、あたし、なんだか、悲しい気持ちになってきた。

「なんかあ、なごりおいしいねー」

ミーシャが涙^{なみだ}ぐんという。

「ばかね、なんで泣^なくのよ、あんたってば」

エリコがいった。でも、あたしも…泣^なきそう。

イースは、だまっとうなずくと、荷物^{にもつ}をしょって、背^せをむけ、扉^{とびら}をあける。

ANKAが、

「さ、いこうか」

そういつて、イースにつづく。長い廊下^{ろうか}を、あたし、歩く。

階段^{かいだん}を下^おりる。暗鬱^{あんうつ}なエントランス。玄関^{げんかん}を出る。ふり返り^{かえ}、雪

をかぶった古い建物を見上げた。逆光^{ぎゃくこう}にそびえ、ただ、じいっと、

だまっているだけだ。

「さよなら、パルメニデス寮……」

日陰の凍った雪をふんむ。路地を歩き、事務局に出立のとどけをしてから、門にむかった。大聖堂のまえまで来た。

巨大な聖堂は朝日を浴びて、蒼穹へ、せり上がる山脈のようにいかめしく、空のはんぶんをかくしている。

鐘がひびいた。この音声をきくことも、もう、ない。

これがムジョー、あたし、そうおもった。タカフシ先生、さようなら。

あいさつにしようとしても、先生は、つぎの受講生の講座があるからといって、会ってはいくれなかった。

あたし、じぶんから、積極的にお札のあいさつにしようなんて、殊勝なことを考えたのは、はじめてだった。

「やばい、あたし、おとなじゃん」

なんて、おもしろいことも、泣きたいきぶんは、ここから離れない。

アカデミアの門まで来た。

トンネルのような門。門をぬけると、雪が降りはじめていた。しんと降っている……

あいかわらず、無表情なシールド部隊ウォール。列を乱さず、凛と立っている。

バリエースは、数人しかいなかった。そのうちの1人があたしたちを、じっと見ている。

あたし、ふり返った。降る雪に、そびえる非情の城門。イタルのまなざしを感じた。城壁のいろ、なにも、変わっていない。

同じように、ふり返っていたイースがいう、

「みじかいあいだったけど、愛着がわいたのかな。

なんだか、さみしいね」